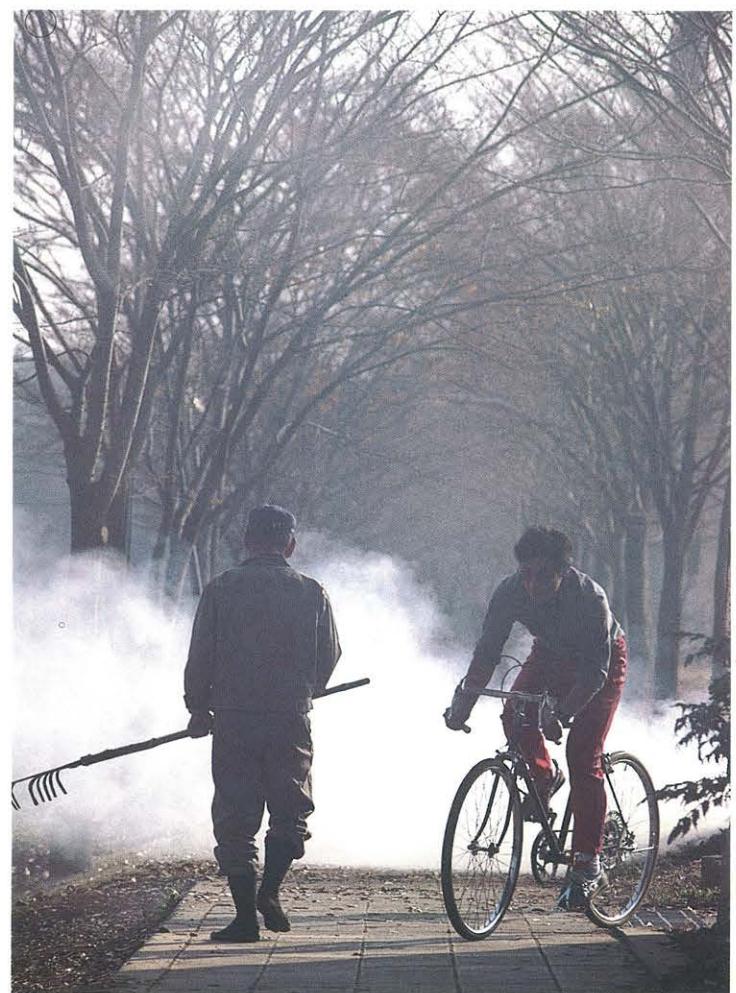


自転車のある つくるばの楽しい生活



自転車のある つくばの楽しい生活



写真：斎藤さだむ

サイクリング・ルートマップ



地図を添えて応募された方の
ルートをまとめたものです。

- 澤口としさんのルート (p.40)
- 太田道男さんのルート (p.45)
- 藤沢宏さんのルート (p.52)
- 秋山隆一さんのルート (p.71)
- 杉原洋子さんのルート (p.115)





はじめに

つくばのセンター地区にはペデストリアンが整備され、さらに近い将来駐輪場の建設も計画されるなど、自転車の利用しやすい環境にあります。都心への自動車の集中を始め、様々な交通問題が懸念される中、こうした環境を活かし、自転車をより積極的に活用することは、今後のつくばの都市交通を考える上で重要な要素になると思われます。また、自転車の活用は、新たなつくばの魅力を引き出す可能性を持っているともいえるでしょう。

(財)つくば都市交通センターでは、こうした考え方から、市民の方々に自転車を利用することの魅力、楽しみ方などを紹介してもらい、今後の自転車の利用促進の展開に結びつけようと、「自転車のあるつくばの楽しい生活」と題した市民レポートの募集を行いました。

本書は、ご応募いただいた作品を掲載したものであり、この小冊子が、多くの方々にとって自転車の魅力を再発見するきっかけとなり、ひいては、まちの交通手段の一つである自転車についての認識が広まることになれば幸いです。

最後になりましたが、市民レポートにご応募いただいた多くの方々、後援をいただいたつくば市教育委員会、審査委員をお引き受け下さった方々、並びに業務にご協力いただいた(株)聚文化研究所に厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月

(財)つくば都市交通センター
理事長 浅谷 陽治

目次

はじめに	1
目次	2
募集	4
応募	5
審査	7

1. 生活の中で——見慣れている景色もなかなかどうして——

飯塚 忠男	『リンリン散輪 ふる里さがし』	9
池田 陽子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	12
上野 薫	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	14
大澤 洋子	『樹のトンネルで夢さがし』	18
小原 悅子	『私とつくばと自転車と』	20
Y.T.	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	23
西岡 礼子	『自転車に乾杯』	25
松下 恵子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	27
松場 久美	『美しき自転車乗り』	30
吉田 礼子	『自転車で走りましょう』	32

2. おすすめスポット——こんな場所はいかが?——

井上 淳子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	34
加藤 操	『自転車の街つくば 探訪レポート』 ～四季の並木めぐり～	36
神谷 栄子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』 ～ゆりの木通り～	38
澤口 とし	『映画は自転車に乗って』	40
森谷 洋子	『つくばを自転車で走る楽しみ教えて』	42

3. おすすめコース——今度の週末、天気が良かったらぜひ—

池上 敦子	『自転車つくば紀行小さな旅』	43
太田 道男	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	45
根本 健一	『つくば・土浦コミュニティロードの提案』	…	49
藤沢 宏	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	52
古川 恵美子	『自転車で楽しむつくばの風景』	55

4. 家族で楽しく——マイカー旅行の目先を変えて——

斎藤 具子	『自転車に乗ってベルを鳴らし』	58
土田 祐理子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	60
中村 美穂子	『カルガモサイクリング』	62
日比野 明子	『出会いの楽しさ』	64
匿名希望	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	67
匿名希望	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	69

5. 通勤・通学——ブルーマンデーを楽しく——

秋山 隆一	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	71
草野 文雄	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	73
佐伯 佑子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	76
肥後 伸子	『つくばビギナーの自転車生活』	78
匿名希望	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	82

6. 冒険旅行・こんな出来事——自転車だからこそ——

石田 豊	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	84
小方 順子	『わが家の自転車』	87
ハーメド・アーマディヤール	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	89
宮本 友和	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	91
山田 陽保	『つくばと私の自転車開眼』	93

7. 提案・アイデア——こんなふうにしたら——

池田 絵里	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	96
石田 雅樹	『自転車生活と筑波大生のモラル』	98
Y.I.	『自転車のあるつくばの楽しい生活』へよせて	101
栗山 正光	『車社会の発想と自転車』	106
坂口 次郎	『ペデストリアンの舗装について』	108
佐野 俊代	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	113
杉原 洋子	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	115
竹田 敏	『自転車のあるつくばの楽しい生活』	
	に対する提言	118

※各々の作品を当財団で7つに分類させていただきました。各ジャンル内は50音順です。

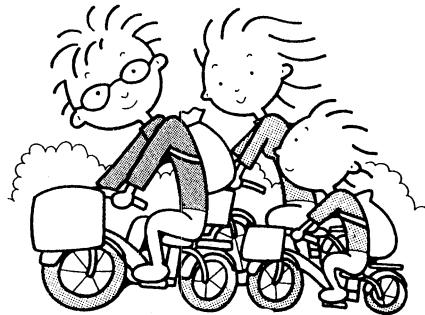
募集

作品の募集にあたっては、以下の内容でチラシ配布等を行いました。

自転車のあるつくばの楽しい生活 市民レポート募集

主催／(財)つくば都市交通センター 後援／つくば市教育委員会

つくばには「つくば公園通り」など自転車での散策に適した通りがいくつもあります。このつくばのまちを自転車で走る楽しみ方をレポートにまとめてみませんか。おもしろい場所、お店、自分だけのとておきの楽しみ方、こうしたらもっと楽しくなるといったアイデアなど、自転車で目にしているものや体験、提案を「自転車のあるつくばの楽しい生活」というテーマで自由に綴って下さい。



応募資格 つくば市内に住んでいる方、またはつくば市内に通学、通勤なさっている方なら年齢を問わず、どなたでも結構です。家族や友達同士などグループで応募いただいても結構です。

応募形式 B4 サイズの400字詰め原稿用紙3~5枚程度。ワープロ原稿も可。(写真・地図などを添付しても結構です)
作品には氏名(代表者名)、年齢、住所、電話番号、職業または学校名を明記して下さい。
なお、応募された作品は返却いたしません。また、当財団の出版物に掲載させていただく場合もありますので、あらかじめご了承下さい。作品は未発表のものに限ります。

募集期間 平成5年9月1日(水)～平成5年10月31日(日) 当日消印有効

審査発表 平成5年11月上旬 入賞作品は本人に通知いたします。
優秀作品5編 佳作数編

お問い合わせ

／応募宛先 (財)つくば都市交通センター市民レポート募集係 〒305 茨城県つくば市吾妻1-5-1
TEL 0298(56)3033

応募

募集の結果、45通の応募がありました。応募者の属性は、以下のようになっています。

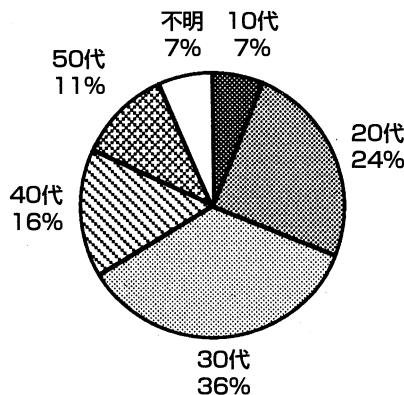
男・女内訳

応募者45名のうち、男性は16名、女性は29名でした。

年齢

17歳から59歳までの応募があり、20代、30代の応募が目立っています。

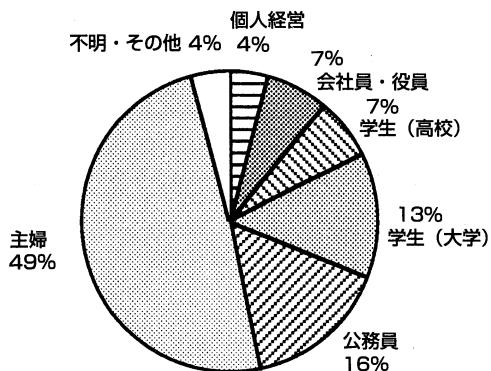
年齢	
10代	3名
20代	11名
30代	16名
40代	7名
50代	5名
不明	3名
合計	45名



職業

主婦から会社員、個人経営まで広く応募がありました。このうち約半数は主婦が占めており、学生からの応募も比較的多くなっています。ただし小中学生からの応募はありませんでした。

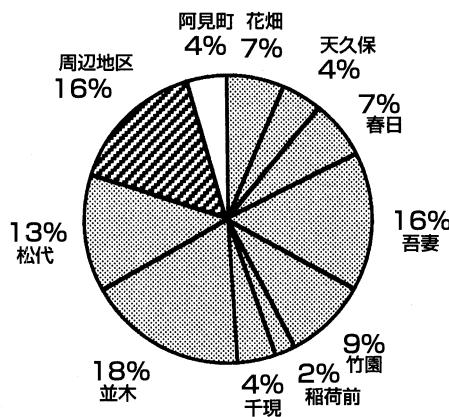
職業	
個人経営	2名
会社員・役員	3名
学生（高校）	3名
学生（大学）	6名
公務員	7名
主婦	22名
合計	45名



地域

つくば市在住43名、阿見町在住2名の方から応募がありました。うち8割が学園地区に住む方からのものでした。

住所	
花畠	3名
天久保	2名
春日	3名
吾妻	7名
竹園	4名
稻荷前	1名
千現	2名
並木	8名
松代	6名
作谷	1名
大砂	1名
古来	1名
大角豆	1名
山中	1名
谷田部	1名
*阿見	1名
*荒川本郷	1名
合計	45名



* - 阿見町

審査

優秀賞、佳作の選考にあたっては、学園都市に深い関わりをお持ちの、
川手昭二 芝浦工業大学教授（前 筑波大学教授）を始め、5名の方々
に審査をお願いしました。

審査委員

川手 昭二	芝浦工業大学教授	《審査委員長》
井坂 敦實	つくば市教育長	
井口 百合香	暮しの企画舎代表	
御船 哲	住宅・都市整備公団つくば開発局長	
浅谷 陽治	(財)つくば都市交通センター理事長	

審査結果

審査結果は、次の通りです。

優秀賞 [7編]

石田豊（松代）、太田道男（並木）、草野文雄（花畠）、佐野俊代（並木）、澤口とし（並木）、中村美穂子（谷田部）、肥後伸子（松代）

佳作 [16編]

飯塚忠男（作谷）、池上敦子（吾妻）、池田絵里（稲荷前）、小原惇子（松代）、加藤操（春日）、栗山正光（阿見町阿見）、斎藤具子（山中）、佐伯佑子（阿見町荒川本郷）、坂口次郎（春日）、杉原洋子（吾妻）、竹田敏（並木）、西岡礼子（吾妻）、ハーメド・アーマディヤール（並木）、藤沢宏（古来）、宮本友和（大角豆）、山田陽保（竹園）

（五十音順、敬称略）

審査にあたって

「自転車のあるつくばの楽しい生活」というテーマに、私はたいへん懐かしい思いがいたします。元々、私は都市開発プランナーですので、どうしてもニュータウンを見ると批判的になりますが、つくばに生活するようになったのは昭和52年からですが、批判ばかりしていてはつまらないと感じまして、生活者の立場からできるだけこのまちを楽しもうと思い立ちました。そこでそれには何がいいかと、最初に考えたのが自転車だったのです。

早速、家内と一緒に自転車を買いましたが、そのうち、それぞれに乗るのもよいが誰かと一緒に乗って走るのも面白かろうと、タンデム（二人乗り用の自転車）を買い、友人が来ると片方に乗せ、公園通りや歩行者専用道路を走るなど、楽しんでおりました。また住宅・都市整備公団つくば開発局がレンタサイクルのアイデアなどを持ち出して来て、なんとかこれを実現させようと勉強会を行い、議論をして内容を詰めていった思い出があります。

しかし、いつの間にかいろいろな事情によって、レンタサイクルの計画は消え、タンデムも普通の市街地を乗ってはいけないという道路交通法の改正で、乗れるのは観光地だけということになってしまいました。

つくばを去って約4年になりますが、今、このまちに住んでいる人がどういう気持ちで自転車に乗っているのか、とても興味をもってこれを読ませていただきました。そして私が昭和52年に自転車を買い揃え、乗っていたとき、新鮮な空気とみどりを胸一杯に吸い込んで走ったときの嬉しさと同じように、みなさんが今も楽しんでいる様子を知ることができました。私はあの頃このような作文をしておりませんので、気持ちが残っているだけで、正確な再現ができません。しかし今回の作文に応募された方々は、私のように歳をとっても、きっとつくばの美しく、明るい情景を克明に思い出すことができると思いました。選考にあたって、どの作品も情感が溢れていて、甲乙をつけることに心が痛みました。結局、審査委員の投票によって、得票の順に入選を決めることにしましたが、それは優劣の差ではないと思っています。

審査委員長 川手 昭二

1. 生活の中で

——見慣れている景色もなかなかどうして——

『リンリン散輪 ふる里さがし』

飯塚 忠男（つくば市作谷）

夕焼け雲を浮かべ、明石大池に夜の帳^{とぎ}が降りる頃、私は決ってサイクリングの道すがら池畔で小休止をとる。水面に映る雲、数えきれない水鳥の群れ。餌をついばむ親子の姿もかすかな羽音もやがては闇の中にとけこまれる。この池は昔、農家にとって大切な用水であったが、ゴルフ場開発や篠や蕪類の繁茂で様相が一変した。しかし、四季の景は自慢の一つである。春は雨、葦の芽の緑が水面にゆれ、細い雨が美しい模様を描く。夏は花、池一面薄紅色の蓮の花が揺れる様は絵のようで、極楽浄土もかくやとばかり。秋は鳥、夕焼けから生れ出たかのように飛来する。賑やかに鳴き合い呼び合い、やがて静寂の世界が水面に広がる。冬は雪、森も林も松の枝々も白一色、水面に枯れ残った葦にも雪が朝の光を受けてやさしくゆれる。

大池を後に又ペダルをこぐ。小さな灯を頼りに畠中の路を進む。彼方に明るい一画を見る。「あんなところになにが？」と近づいてみると、いつの間にか山林が開かれ、忽然と街が生れていた。そんなはずが、と思うものの門^{カド}には車が止まり、灯のもとには夕餉をかこむ家族の様子さえ窺われる。山の中の小さな可愛い街の発見に心をはずませ家路に着いた。出迎えた妻も私の話に目を輝かせ、「今度連れてって、私も見たいわ。」と街への訪問を催促する。

今日もまた、リーンと鈴の音を残し玄関を出る。門^{カド}を曲り坪内を走る。毎日の通勤路なのに、でこぼこや小砂利や石ころの多さに気づく。国道に出る。最近完成したばかりの自転車道の黒いアスファルトが心地よい。「快適！」口笛を吹きたくなるようなはずむ心で坂を下りまた坂を上る。ギアーレバーをカチッと一路東に向う。私の散輪はいつも筑波の山に向つ

て進み、茜雲を目指して帰路に着く。

こんな田舎にと思って住んだ土地ではあったが、健康づくりの為にとこの年になって始めた散輪が、私に故郷の良さを教えてくれた。

思えば、今の幸せはあの日に始まった。

「4万円もするんだよなあ。」とつぶやく私にアイロン掛けをしていた妻が「自転車のこと。」と私の方を向く。「うん、少し無理だよな。子どもらに金の掛かる時だし。ドロップハンドルで18段ギア、シルバーでさ。」未練がましい私の言葉に、「今から行ってみる？」と私を促し、気前よく買ってくれたのが今の私の愛輪である。勤務から戻ると、玄関にピッカピカの自転車が私を待っている。「さあ今日は何処に行くかな。」リーンと鈴を鳴らし当てどない小さな旅への出発。これが私の日課となって、はや半年が過ぎた。

筑波は今、秋の真っ只中。白銀に光る芒の穂が風にゆれ、赤や白の秋桜が遠慮がちに固まり合い咲いている。川面にぬるでの紅が映え、天高く流れる雲のいろいろ。果なく続く紅葉した芝畑等、山の麓の裾模様が美しい。西の空を真赤に染めて夕日が沈む頃、筑波の山の家々に灯が点る。藍色の空を背景に紫の筑波の山は我が故郷の宝である。

車の前照灯と尾灯の赤い列が、二本の線となって果てしない程に長い。信号の無い横断歩道を渡るのは一苦労である。国道と別れて農道に入る。取り入れの済んだ田圃のあちこちから立ち上る野焼の煙が幾筋か。人影はもうない。時折、車のライトが走り抜ける。用心深く左側に寄って待つと徐行して通過する車もある。運転者の心くばりがうれしく、丁寧に頭を下げる。

楽しさと発見の多いサイクリングではあるが、幾分寒さも感じられる頃ともなれば、朝晩の出発には、思い切りとでも言おうか、なにか心のいさぎよさのようなものが求められる。これも五十路の峠を下りつつある年令の所為であろうか。これまでのサイクリングをふり返ってみると、我が家を起点に南に4キロ、北に3キロ、東に7キロ、西に5キロの範囲内で、行程もわずか20キロ弱である。

地図を広げ、指でたどって見て私の散輪の世界の小ささにがっかりする。覗き見していた妻が「キント雲にのった孫悟空の心境ね。」とクックツと笑った。「なあに、これからさ。」と意気がる私。夢が限りなく広がる。

枯れ葉散る公園通りを一気に走り抜けるぞ。

花いっぱいの公園巡り素敵だろう。図書館へも寄ってみよう。芸術鑑賞も悪くないぞ。

リンリンロードが全開通したら、史跡巡りにも挑戦するぞ。妻と二人で走ることを思うだけで胸がおどる。しかし、つくば市の道路事情は決して良くない。特に、周辺地区がひどい。狭い側道、信号や外灯の不足など歩行者や自転車にとって危険がいっぱいである。

一日も早く、これらの問題が解決されることを夢見ながら、今日も愛輪での出発である。

月明りの道を、小さなふるさとさがしに。リン、リン、リン、リーン。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

池田 陽子（つくば市春日）

天気がいいと、自転車に乗って洞峰公園のプールに行く。車だったら5分くらいなのだが、運動しに行くのに車で行くのも変な気がして、それから自転車にした。友達には驚かれたが、最近は「プール行こうよ。」とさそうと、友達の方から「自転車で行く？」と聞いてくるようになったので、二人でチャリチャリと自転車をこいで行く。

行きは西大通りを通る。とにかく家から洞峰公園まで一本道。車道と歩道との間に植えられている花とか「こんな所にこんなお店があったんだ」とか、車だったら絶対に気付かないことがたくさんあるので、ほんの20分ほどこのお散歩（散歩じゃないよね）が私はとても好きだ。そういえば、台風一過の晴天の日のこと。行く手をはばむのは大きな大きな水たまり。いや、池というべきだ。後ろから来た高校生の男の子と二人で波をたてながら渡ったのだった。

帰り道はもっぱらペデストリアンだ。親子連れなんか見ると、ほほえましくて、「ああ、私もこんなかわいい子どもが欲しいなあ。」とついついうらやましくなってしまう。まあ、子どもよりもまずは一緒に手をつないで歩いてくれる素敵なんだな様を見つける方が先だけど……。

途中ダイエーやクレオでのウインドウショッピングも楽しみの一つだ。車だと買い物をしないと駐車料金がもったいなくて、ゆっくり見て歩けないけど、自転車だったらへっちゃらさ！

それから平日だったらクレオの前にある献血センターへ。成分献血専用のセンターで、1時間くらいかかるが、最近は本を持っていくようになった。看護婦さんたちとも顔見知りになって、この間はおだんごをごちそうになった。ごちそうさまでした。

次はアルス。本や雑誌、CDなど、大学の図書館とはまた違う楽しい雰囲気がいい。

そしてペデの坂をえちらおちら頑張って家路に着く。

つくばは本当に自転車で楽しめる町だ。桜の降る春、桜のじゅうたんの上を走る。緑の木々の下を走る夏。秋、きんもくせいの香りの中を走る。冬だって、真白に雪化粧されたつくばはとてもきれいで、自転車で走りたくなる。(ちょっと危ないけどね。)

そんな雪にもビクともしないマウンテンバイクを買うのが私の夢だ。今はママチャリ(カゴつきの普通の自転車のこと。ママさんがお買い物に使うところから名付けられた若者ことば。)だけど、そのうちかっこいいマウンテンバイクを手に入れるんだ。

そして、何年先か分からないけど、その時私はもうつくばに住んでいないかもしれないけど、いつか愛するだんな様と愛する子どもと、そのマウンテンバイクでつくばを走りたい。「お母さんが素敵な青春を送った町だよ」と話しながら。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

上野 薫 (つくば市竹園)

私の自転車ライフがはじまつたのは、2年前結婚して郷里の埼玉を離れ、このつくば市に越してきてからだつた。

独身の頃は、通学も通勤も電車や徒步で間に合つていたので、自転車を生活の必需品のように感じたことはなかつた。

ところが、こちらで生活をはじめてみると、毎日の買い物に、自転車は手離せない友となつた。

自転車の便利な点は、自動車と違つて小まわりがきくところだと思う。車は基本的に地図に載つてゐる大きな道しか通れないし、渋滞でもしようものなら、目的地に着くまでに、かえつて時間がかかつてしまつたりするが、近い場所なら自転車の方が、車が通れないような細い近道を、スイスイ通り抜けてゆけるので、むしろ早いこともある。

竹園に住んでゐる私は、結婚当初こそ、家と近くのスーパーを往復する程度だったが、自転車で走つているうちに、少しずつ行動半径は広がつてゆき、公園通りづたいに洞峰公園まで行ってみたり、吾妻や松見、春日あたりまで行けるようになつた。

自転車のもう一つのメリットは、気楽にどこまでも行けることだと思う。そして、風景を楽しみながら散策しているうちに、思いがけずステキな喫茶店を見つかりすると、うれしくなつてしまう。

ちなみに私のお気に入りの喫茶店は、吾妻の友朋堂書店の近くにある、「珈琲亭なかやま」と、西武の近くにある「サロン・ド・テ・なかやま」である。

「サイエンス・シティ」であるつくばには、無機質で人工的な建造物が目立つ。そんな中で、クラシカルでウッディなぬくもりを感じさせる「なかやま」を目にすると、どこかホッとする。こういう暖かみのある建物が、もっとふえてくれたらうれしい。

それから、劇場や映画館、美術館やライブハウスなども、もう少し充実してほしい。

そしていつか、最近のスローガンでもある「科学と芸術と文化が調和した街」になってくれる日がくることを期待している。

いつも、自転車で市内を走っていると、風にまじってからみついてくる、季節の香りを感じる。春先は沈丁花が、初夏には白いくちなしの花が、そして秋になると、オレンジ色の細やかな花をちりばめた金木犀の香りが、鼻腔をくすぐり流れてゆく。

確かに、つくばの自然是美しい。風薫る5月の頃、緑したたる公園通りを、自転車で走り抜けてゆく気分は爽快だ。桜の季節も美しい。この時ばかりは、ふだん人気のない公園も活気づき、どこもお花見をする人々で賑わう。その中でも、特に私が美しいと思うのは、東竹園公園だ。ここは、桜と共に様々な色どりの花が咲き乱れ、公園というよりは庭園といった趣を感じさせてくれる。吾妻の友朋堂書店の前の街路樹は秋の紅葉が美しい。

このように、気に入ったスポットをみつけると、あらためてカメラを持って出かけてゆき、写真におさめることにしている。私のコレクションの中には、つくばの風景写真が随分ある。

今年の10月2日の夜のことだった。自宅にいた私の耳に、ドーン、ドーンと大きな音が飛び込んできた。窓の外を見ると、遠くの建物の上あたりが、キラキラと明るくなっている。そうだ、今夜は土浦の花火大会の日だったのだ。私の住んでいる公務員住宅の2階からは、片鱗しかのぞめない。そこで私は、もう少しそく見える場所はないかと、自転車で、土浦学園通りを走って行ってみることにした。

歩道はちょっと狭く、自転車専用道路もないで、夜走るのは少しこわい気もしたが、遠くに見える花火につられて走っているうちに、ちょっとそこまでのつもりが、いつのまにか古来あたりまで来てしまっていた。

近くの空き地に、同じように自転車でやってきた人々が何人かいて、夜空を見上げていた。私もその中にまじって、みごとな花火を堪能した。

帰る道すがら、昼間明るいうちに、いつか土浦まで自転車で行ってみようか。などと考えていた。

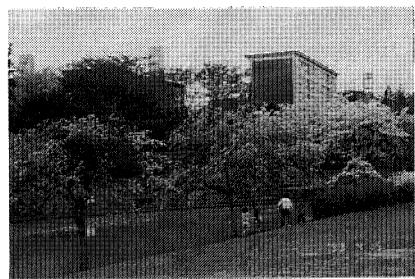
私の楽しい自転車ライフは、まだまだ広がってゆきそうな気配だ。



東竹園公園



東竹園公園



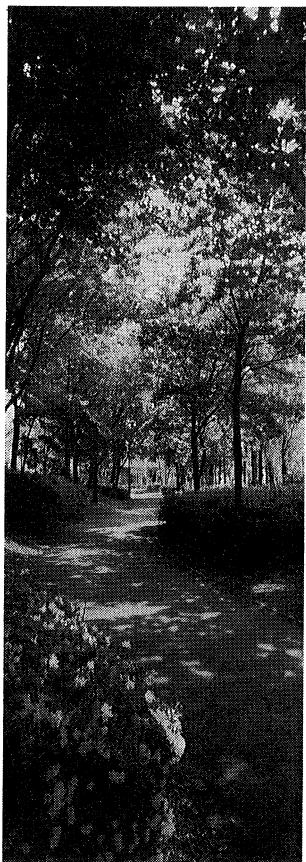
東竹園公園



東竹園公園



東竹園公園



いつも自転車で通っている竹園公園の並木道



友朋堂前の街路樹

『樹のトンネルで夢さがし』

大澤 洋子（つくば市）

ひと頃話題になったアニメ「となりのトトロ」は、忘れかけた自然との一体感を鮮やかに描いた秀作でした。特にトトロの住む森、さつきやメイたちの住む家の周りの、あふれんばかりの緑は今も心に焼き付いてはなれません。

けれどそんな自然も、思い出やアニメの世界でしか輝けないとしたら…。事実、私の育った田舎も、年を追うごとに空き地や林が姿を消し、マンションや駐車場になってしまっています。

しかし、ここつくばで暮らすようになって、まだまだ現実も捨てたものではないと実感する毎日です。

最初は人為的に植えられた公園や街路樹の緑も、年々大きく枝を広げ、新しい森を作り出さんばかりの勢いです。そんな光景を目にするとき、ただひたすら「がんばって！」と声をかけたくなります。

買い物、子供の送り迎えなど、自転車なしに考えられない「自転車族」の私には、つくばの環境は発見と驚きと、思い出になったトトロの世界との再会のように思えてなりません。

数々ある発見の中でも、ピカイチはやはり「樹のトンネル」でしょうか。もちろん名付親は「トトロ」のさつきやメイたちですが…。

遊歩道をはさむように植えられた並木が枝や葉を広げ、先端同志が重なりあって、見上げても空が見えない、天井のようになった場所のことを言います。

自転車を走らせていると、この深い緑に染まった、ちょっと不思議な雰囲気のトンネルが、いくつもいくつも出現するからたまりません。

あの道の先はどうなってるんだろう。こっちはどうかな。と、トンネル探しで思わぬ道草を食ってしまったこともたびたびです。

でも、そういう時にかぎって、獣道ならぬ意外な抜け道を発見したりす

るものですから、この悪癖一向に治まりそうにありません。

夏の焼けつく日差しのなかでも、ここだけはひんやりとすがすがしい空気をたたえています。おまけに葉と葉の間の僅かな隙間から光がもれて、緑の星いっぱいのプラネタリウムに早変わりです。

しかもこのトンネル、味もそっけもないコンクリート製とは違い、春はパステルグリーン、夏は深い緑色、そして秋にはオレンジや黄色に変わり、その鮮やかな変身ぶりは、他ではちょっと真似できない魅力にもなっています。おまけに冬には、天井もオープンになって、暖かな日溜まりも作ってくれるという気の配りよう。

こんな四季おりおりの表情や、思いやりいっぱいのトンネルを、ただあたふた走り去ってしまうのがもったいなくて、ときどき私は自転車を降り、歩いてみたりします。

重なりあった葉影や、ちらちら射し込む光の中に、忘れた遠い日々をつけたり、映画や小説のワンシーンがよみがえったりします。

育ちすぎた私でさえ、ふっと現実を忘れて夢の世界に迷い込めるトンネルです。子供達はもっともっと、さまざまな夢を見つけることでしょう。

ひょっとしたら、「本物のトトロにあえちゃった！」なんて言い出す子が現れるかも。

そんな夢にも手が届きそうな、不思議で素敵な「樹のトンネル」たちに乾杯！

『私とつくばと自転車と』

小原 悅子（つくば市松代）

昭和55年の3月、東京からつくばに転居してきた。主人も私も、車も、トーゼン運転免許証ももっていなかったので、宿舎は東大通り沿いにあるバス停留所のすぐ近くを申し込んだ。

転居してきてから半年ばかりは、新しい土地に対するめずらしさもあって、二人で自転車をならべては、東大通りから学園平塚線に入り、西大通りを経て北大通りに帰るというコースでよくサイクリングした。

平塚通りでは横にそれで、川沿いの土手に自転車を止め、釣好きの主人につられて私も一緒によく川面を覗き込んだものだ。

透明で姿も形もかわいい小魚がびっしりと群れていた。フナやメダカやゴリ（こちらではなんというのだろう）しか知らなかった私は、こんな小川にこんなきれいな魚がいるなんて、とえらく感心したものだ。

タナゴなる名前を主人から教えてもらったのであるが、あのタナゴの群れは今も変わらずあのままかしら……。

ある時は突然「ケーン」とするどく一声、足元の茂みからキジが飛び立ち、驚く程の長距離飛行で西大通りの森の中に消えていったこともあった。山陰の田舎育ちの私は、雉も山鳥もなつかしい。しばらくの間、雉が消えた森の彼方を見つめていたものだ。

自転車道としては、もっともポピュラー、もっとも有名なつくば公園通り（この名称は昭和58年公募で決まった）よりも、私も主人も幹線道路からちょっと横にそれた“田舎の畦道”などの方に好んで入っていったのは二人とも地方出身者、田舎育ちだったからであろうか。

ある時はもっと北にそれた“要”という地名の所で、大きな家の棟上げ式に行きあつたこと也有った。「誰でもいいんだよ」などと声を掛けられたのを良いことに、屋上からまかれたお餅やお菓子を沢山拾って帰ってきたこともあった。

西大通り平塚にあるK園芸店にもよく行った。季節の花やちょっとした野菜の苗などを買ってきては花壇やベランダで楽しんだものだ。

週末毎にあちらこちらウロウロと、自転車を引き出しては“つくば探訪”をしていたのであるが、思えば私39歳、主人42歳、主人も私も体力も好奇心もまだ十分にあったのだというところか。

しかし、雨の日の主人の通勤の足、買物、土浦の音楽教室に二人の娘達を連れて行くための足、人やグループ交流……。つくばはやはり広かった。そして致命的ともいいうべき公共交通機関の量の少なさ……。

車の所有など考えてもみなかった我が家だったけれども、足、自転車、人力パワー、それらにそろそろ限界を感じ始めていた頃「免許、取つといでよ」の主人の一聲。幸い自転車で通えるところに教習所もあり、私はすぐに申し込んだ。

3ヵ月かかって免許取得。追っ付け主人も取得して、転居して来てから1年もしないうちに思ってもいなかった、免許及び車の所有者となってしまった。

それからは、自転車を並べてのサイクリングから、県内の周辺地区、県北、県外、栃木、群馬などにある名所景勝地への家族ドライブへと移行。随分あちこち運転の練習も兼ねて行ったものだ。そして、所有してみればやはり車は便利である。雨につけ風につけ、運べる荷物の量、時間の短縮、行動範囲のひろさなどなど……。

二人の娘達も成人し、今はまた、主人と二人だけで行動する事が多くなったこの頃であるけれども、もう、車、車、どこへ行くのも車である。主人56歳、私53歳、脚力もそれなりにまた年月にあわせてというところか。

しかし……本来……私は自転車、嫌いではない。初めて乗ったのは小学校4年生の時。父の自転車を借りて、近くにあった幼稚園の園庭で、父に後ろを支えてもらいながら、何度も何度も練習した三角乗り。初めて“婦人車”なるものを買ってもらい、うれしくて得意でたまらなかった中学生の時。坂道を走りおりたところで、登ってきたスクーターと正面衝突、3メーターぐらいふっとんで、前歯を折った高校生の時。自転車にまつわる思い出も数々ある。

昭和61年、松代に家を建てて宿舎から転居。以来“庭付き住宅のあるじ”となった主人は、庭いじりなるものに余念がなく、自転車を並べてのサイ

クリングも、まるで遠い昔話の一つなんて感じになってしまった。つくばにきてから14年である。

そして私は、仕事に買物に、車びたりの毎日ながら、それでも時折、住区にあるショッピングセンターにいくために自転車を引っ張り出しては、とある所の、とある場所で一休みする。

松代公園。我が家から程遠くない所にあり、ショッピングセンターに行くための遊歩道と一体となっているのであるが、晴れやかにして静かな公園。

池のほとりのベンチに座って、池の向こうに広がる空を眺めていると、うーん、そう、気持ちも心もびやかに広がっていく。

さほど広くない、さほど人に知られてもいない、けれども落ち着いた品のいい公園。私のお気に入りの場所である。「車ではこうはいかないものね~」なんてつぶやきながら、このひとときがほしくてやはり、時折、自転車をひっぱりだす私なのです。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

Y. T.

桜散る頃、私はつくばにやってきた。この広いつくばでの生活の中で、私が、まず最初に強く感じたことは、車の必要性だった。しかし、私は車を運転しない。ゆえに、この車社会であるつくばで、自転車だけがたよりと言っても過言ではない。というわけで、つくばに来て以来、ほとんど毎日、自転車に乗って探索に出かけている次第である。まず手始めに、いくつかの公園に行ってみた。うれしいのは、公園の中を自転車で自由自在に行けるようになっていることで、段差があるところでも、そばにスロープが作ってあるところが多い。そして、木々に囲まれた通りが、これらの公園と公園を結んでいる。この通りがつくば公園通りと呼ばれ、松見公園から赤塚公園までの7つの公園を結んでいる。約5キロメートルも続くこの通りは、歩くには体力的にも時間的にも少し大変だが、自転車にはちょうど良い距離である。この通りを走って公園のハシゴをしていると、まるで、ひとつの公園の中を走っているような気がしてくる。そして、桜散る頃、新緑の頃、そして落ち葉散り敷く頃と、四季それぞれの風情で私達の目を楽しませてくれる通りなのである。また、ところどころに起伏があるので、下り坂になった時のあの風をきる爽快さがたまらない。人がいない時は、思わず、足をバーッとひろげて、子供の頃に戻ってしまうのである。このように、自転車にとっては、とても楽しい通りであるが、そのように思えるのも、この通りの幅が十分広くあり、歩行者にだけ注意して走ればいいからである。普通、道路で、車と自転車が肩を並べて走れば、事故の被害者はつねに自転車であるし、せまい歩道で歩行者と肩を並べて走れば、加害者にもなりうるのである。こういうことから考えても、ますますこのような通りが増えてくれることを、自転車愛好家としては望みたい。

ところで、今や、私をはじめ多くの人々の生活に密着し、そしてこよなく愛されてきた自転車であるが、いったい、いつ発明されたのであろうか。

これについて、「自転車の文化史」（佐野裕二著・文一総合出版）によると、発明された時期は、その発明の原点をどこにするかという見方により、幾通りかの議論（1813年から1874年まで）にわかれそうだ。が、とにかく、1800年代にヨーロッパで発明されたということは確かだ。その後、アメリカに伝わり、ついで、日本には、明治維新前後に多くの西洋文明とともに上陸し、大勢の日本人達は、おもしろがって乗り回したということだ。既に、この頃から自転車は、人々の心をしっかりとつかんでいたということである。2つの車輪をタテにつなげ、ペダルを踏むだけの簡単な乗り物ではあるが、約200年もの歴史があり、世界中の人々に愛用され続けてきているのである。あのキューリー夫妻の新婚旅行も自転車だったそうだ。私も、キューリー夫妻にあやかって、つくばに来てからはじめて迎える今度の結婚記念日には、夫とふたりで、自転車で出かけてみようかと思う。“メモリアルサイクリング” なんてどうかしら…。

『自転車に乾杯』

西岡 礼子（つくば市吾妻）

私の日常の足は自転車である。遠出のとき以外はジャスコで買った白色の二輪車に物入れ用のカゴを2つ付けて愛用している。気の抜けない相棒だ。

「つくばにいて車の免許証なしでよくやっているわね」とあきれられたり驚かれたりして、もう15年になんなんとする。

歩いても行ける距離の職場に車で通う人の「お昼休みには家に戻って食事の後、朝干した洗濯物や布団を取り込み、お掃除もする」という言葉に、ただただ「働き者、主婦の鏡ね」と頭を垂れる。たしかに車は便利で、時間を生み出してくれる。我が家にも車は2台あって夫と息子に重宝されている。が私は事故を起こしたら人生一巻の終わりと極端に考えているので運転するのも乗せてもらうのも敬遠している。

自宅のある吾妻3丁目と氣功・大極拳の道場（上の室）間を週になんどか往復する。もちろん自転車で、である。その線上に商店街、銀行、郵便局などがあるので出たついでにもろもろの用件は済ますことにしている。道草も樂しき哉。

晴天の日の道場への道すがらは最高だ。季節の訪れを告げる樹々や花々、小鳥などを愛でながらペダルを踏む。口もとが自然にはころびメロディが流れ出る。「ラララ……」

松林に囲まれた池には白鳥が端正な姿を見せている。プラネタリウムのある公園と図書館の間のけやき並木を抜けると、あじさいの植え込みとこぶしの林。葉むらでザワザワ鳴る音を後に聞き、小学校に隣接する公園に入る。春は桜の花のトンネルと雪柳に迎えられる。秋には金木犀の香りが一面に漂っている。中学校のグラウンドを横目に過ぎると旧村の田園風景が広がる。筑波山も見える。田んぼの四季、栗林の新芽から細長い花を垂らし、毬栗を付け、枝だけに戻る——そんな繰り返しを眺めてもう5年。

畦道には春はふきのとう、おおいぬふぐりの青い花々が、秋にはスキ、
イヌタデなどが「こんにちわ。」路の真中で通せんぼしているのは赤棟蛇
だろう。キジの家族、白サギの優雅な姿も目にする。野良猫たちとの挨拶
も欠かせない。

いつもさわやかな自転車日よりとは限らない。雨の日や風の強い日は要注意だ。傘を左手に右手でハンドルさばきをする。視界も狭まるので神経を耳に集中させる。それでも、歩道に乗り上げて来たトラックの音にも大きな団体にも気付かず「あわや」の寸前になったこともある。雨水の薄いカーテンをかけたような舗道を走っていて、バランスを崩し、横倒しに足ならぬアゴが着地し痛い思いをした上、洋服までドロまみれ——みじめな格好で道場に出むく羽目になった。そんな雨風の日までなぜ行くの——自問自答をして「そこに道場があるから」と結論を出す。「中年になるとどの人もみんな真面目人間になる」と某心理学者のコメントに納得したものだ。

こんな風に私のつくばでの生活に色どりを添え、奮闘してくれている自転車なのだが、その扱われたるや悲惨である。掃除はいうにおよばず、注油もしない、野晒し状態の消耗品扱いなのだ。錆びてきて見映えがしなくなるとハイ交替となる。当地に来て3台目も汚れが目立ちはじめた。あまりにも可哀相ではないか。今夜は車体を清め、ぶどう酒ならぬ好物の油をたっぷり注ぎ、感謝と労いの杯を捧げよう。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

松下 恵子（つくば市吾妻）

つくばに住んで5年になる。以前は東京の都心部に住んでいた。駅に近くどこへ行くにも便利だったので、自転車の必要性を感じたことはなかった。また、近所で自転車に乗っている人を見かけることも少なかった。交通量が多かったせいか、子供を後ろに乗せたり、幼児が一人で乗って走る姿も記憶はない。そんな場所からつくばの中心地区に移ったのである。一番先に感心したのはなんといってもペデストリアン。車道からは完全に独立し、人も自転車もベビーカーものびのび行き交っている。「ああ、ここなら安心して子供を育てられるな。」と、しみじみ思い、すぐに私も自転車族の仲間入りをした。

そして一児の母となり、後ろの席に乗っていた子供も今では補助輪付きの自転車を自由自在に乗り回している。ペデストリアンのおかげで安全だし、上達も早い。そんな私達親子の日常生活はやはり自転車ぬきには語れない。買物はもちろん、どこへ行くにも自転車である。学生達に混じってこのような親子連れがたくさん行き交うのもつくばの街の特徴ではないかと思っている。

「ねえ、自転車で行く所でどこが一番好き？」

と3歳の娘に尋ねると、即座に

「松見公園！」

と、元気のいい答えが返ってきた。わが家から娘の脚力で約15分。センター広場の横を通り並木の美しい公園通りを抜け、北大通りにかかる橋の勾配にもめげず大好きな公園を目指してペダルをこぐ。大人の私にもこの坂はきつい。一生懸命自転車を押して進む娘を振り返り、坂の途中で声援を送る。最後の段差を乗り越えて到着。おやおや、いつの間にか娘は先に自転車をおり、走り出している。

松見公園の展望塔や日本庭園はガイドブックでおなじみだが、西側の松

林の一角にある遊具の広場は、あまり知られていないかもしれない。ここはタイヤのブランコや大小の滑り台をはじめ、吊り輪や土管、つり橋に平均台など、全身を使って遊べる木製遊具が主体で、子供達はいつも歓声を上げて飛び回っている。私はその間ベンチで読書。木陰なので夏でも快適に過ごせる。帰りに近くの古書街をのぞいたり、公園の巨大な鯉に至近距離でパン屑をやったりするのも楽しみである。

それから、なんといってもアルス。最新の設備と豊富な蔵書数を誇る図書館はもちろんのこと、美術館も良質な展覧会が無料で開かれることも多く、見逃せない。また、館内にある喫茶店「ヴェローチェ」は外からも入れ、テイクアウトができる。雨天時以外は中庭にテーブルと椅子が出しているので中央公園を眺めながらゆっくりとティータイム。子供用の乗り物も2台あり、時には争奪戦も見られるが、それもまた楽し。

学園地区は新しい街なので、公園が多く道も整備されていて子供連れにはうれしい。自転車で日常生活を送る時、自動車や信号とほとんど無縁でいられるというのは本当は珍しいことであるし、不自然なはずである。だが、ここで暮らしているとそれに慣れ、普通に思えてくる。時には初めて来たときのことを思い出してみたい。

たとえば、自動車が通らないからといってバイクが通っていいのか。特にナンバープレートを見えにくくしたヘルメットなしの若者が多い。近くの駐輪場ががらがらなのに建物の前はいつも自転車で大混雑のショッピングセンターや図書館。私もついその混雑の方に止めてしまう。反省。交通センター周辺に多く見受けられる放置自転車。また、後部席がないタイプの自転車の二人乗りは見慣れたとはいえ、今でもあぶなっかしく思う。後ろの人、乗り心地（立ち心地）はいかがですか？

それから、困ることを一つ。夜になるとペデストリアンは薄暗くなる。街灯が少ないので木立ちは闇に沈む。車道の明るさとは対照的だ。人通りが少なくなるとはいえ、もう少し明るくならないものか。そして不思議に思うのは、大通り沿いの歩道にある歩行者と自転車を分ける線。わざわざベンキでその旨記してあるが本当に必要なのだろうか。そのルールは守られているのだろうか。通るたびに考えてしまう。

時折三井ビルの展望デッキからつくばの街を見渡すことがある。一直線に延びた道路、立ち並ぶビルや住宅群。流れるような車の列からいつもの

ペデストリアンへ目を移すと、そこはのんびりとした緑あふれる空間。歩く人も自転車に乗る人もマイペースでほっとする。そして筑波山はそんな若い街を見守っているように思える。さあ、今日はどこへ行こうか。娘の補助輪が取れる日もそう遠くはないだろう。

『美しき自転車乗り』

松場 久美 (つくば市千現)

市立図書館での用事を済ませた私は、建物の外へ出ると、初秋の心地よい空気をまず胸いっぱいに吸い込んだ。そして愛車SILVER・BLAZE(銀星)号にひょいと乗り、センタービルの方向へゆっくりとペダルをこいでいった。上り坂の途中まで来ると、初秋の空気はかすかなアーモンドの香りとなって私を包んだ。そのまゝ一息に橋の上——私はよくここで自転車を止め、橋の左右の夕景に見入る。

少なからぬ人々が、つくばは味気無い街だと云う。そう、確かに際立つた景観や、活気に満ちた生活のにおいには欠けているかもしれない。やっと大きくなった街路樹も、実はさほどきれいに色付いてはくれないので。しかし、すでに見慣れたこの街が時として示す静かな自然の変奏は、その度毎に、私の心を驚きと慰めで満たしてくれる。

三井ビルに至るまで、辺り一帯を古代めいたものにしてしまう霞がかつた春の朝、木下闇が強烈な明暗を生み出す夏の公園、世界がタイル張りになつたかのように、すべてのものが硬質で透徹した姿を見せる冬の晴日。そして今は秋。青空が、関東平野の上につきぬけるように広がっている(あゝ、何という遠さ!)。或いは道端の植え込みの葉一枚一枚に、陽光がきらめいている(あゝ、何という近しさ!)。

竹園ショッピングセンターの手前まで来た時、近所の団地の一室からピアノの音が流れてきた。明るい午後に似つかわしいメロディだ。以前に聞いたことがあるけれど、曲名を思い出すことは出来ない。まだ幼いに違いないピアニストは、少しぎこちない音粒をはじき出す。そしてその手の下で、黑白の鍵盤がつやつやと光っているのだろう。

だが私は自転車を止めることなく、その場を走り過ぎる。自転車で走り過ぎる時、何故かあらゆるもののが一層美しく感じられる。あらゆるありふれたもの達が。そして私はふと思うのだ、時間もまた、私達を一層美しく

感じるために、私達の傍らを走り過ぎていくのだろうかと。

『自転車で走りましょう』

吉田 礼子（つくば市松代）

今回のレポート募集を知り、『これは私が書かねば』と、使命感すら感じたほど、私は自転車が大好き。

私と自転車とのつき合いは13年前、熊本に住んでいた頃から。まだ3才だった息子を後ろの席に、1才の娘を前に取りつけた椅子に乗せて、商店街へ毎日のように通いました。ぐずっていた子供も自転車に乗せると御機嫌さんで、本当に助かりました。

数年後、札幌へ越してからは子供達もそれぞれ自転車に乗れるようになります、近場はどこへでも3台の自転車を連ねて出掛けました。11月の声を聞くと札幌では雪が積もり始め春の雪どけまで自転車とお別れでした。

物置で静かに眠っていた自転車達が春の訪れと共に賑やかに走り出すのです。

豊平川沿いや真駒内あたりのサイクリングが子供達の成長と共に懐かしく思い出されます。

こゝ、つくば市松代へ越してきて1年半。相変わらず私の暮らしは自転車と一緒に。

水泳が好きな私は、まず洞峰公園まで自転車で出掛けました。10分もかからずに到着できるのが、正直なところ越してきて一番嬉しいことでした。途中には田んぼが広がり、その向こうに筑波山が望めました。まだまだつくばには自然が一杯。これが二番目に嬉しかったことかもしれません。

やがて図書館やデパートへも足が伸びるようになり、つくばの中央部を走るペデストリアンの存在を知りました。いいものがあるものだなと思いました。この道の圧巻は、竹園から吾妻の方へと幹線道路をまたいで渡る橋のあたりでしょうか。研究学園都市を実感させるものがありました。そしてアルスホールからエキスポセンターへ降りていく道も素敵です。この道の欠点は、あちこち段差が多いこと。年を経るにつれひどくなってきた

のでしょうか。先日は竹園の方へ下る途中で、段差に車輪をとられ、ころんでちょっと痛い思いをしました。二の宮への道も橋の所など、も少しだらかにしてほしい所があります。

春の頃は、二の宮あたりの桜が美しく、遠回りでも花の下を走って帰りました。

咲き初めて散るまでの桜を走り抜けながら存分に楽しみました。

私にとって、自転車の最大の魅力は、このほど良いスピードと共に自然を満喫できることにあります。

春夏秋冬、折々の氣味や人々の暮らしが、自転車で走ると、一層身近に体感できるのです。時には歌や俳句が浮かびます、時には帰りに摘んできた野の花達が食卓に飾られます、時には急な雨や雷にこわい思いもしますが、やはり、自転車はとても魅力的です。

土浦や牛久方面へもチャレンジしてみました。周囲の景色を楽しみながら走って50分程で町なかへ到着。帰りはできるだけ、別のルートを捜して帰ります。

ちょっとの遠出をすると、探険気分も味わえ、いろんな出会いや発見があって心楽しいものです。

健康のためにも“自転車”いかがですか。

2. おすすめスポット

——こんな場所はいかが?——

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

井上 淳子(つくば市花畠)

私は昨年の春、こちらの花畠に引越してきました。自然が残っているとてもいい所です。少しした買い物の、子供のおけいこ事の送り迎え等、自転車はかかせないものです。少しした買い物というものは、ほとんどの買い物の生協に頼っているからです。それでも西武デパートやダイエーとか買い物に行くこともあります。

NTTの横を走りひたすら、ちょうど東大通りと西大通りのまん中に位置する道路を南に走ります。2個目の信号が平塚通りというくらい、車にとっても穴道のようで擦れ違うのはせいぜい5台ぐらいまでです。その間、長い広い筑波大の敷地を左にしながら走るのです。春にはうぐいすの声、とてもいい声で鳴いてくれます。アスファルトと構のわずかなすきまに咲く野のすみれの可憐なこと等、緑の季節の変化が楽しめる所です。

平塚通りを渡り少しくとぼたん桜の並木が続き、そこは自転車用(歩く人用かな?)の道もあり爽快に走れます。黄色のれんぎょうの花やぼけの花、ここも春はとてもきれいな通りです。それから私は大学の中を失礼して走るのですが、ここもこの春通った時、ちょうど桜が散り始めていて風が吹いて花吹雪の中を走れたのです。それは雪のようにはらはらと舞い落ちきれいでした。そこから先はメディカルセンターの横から自転車優先道に入り松見公園を横に見ながら走ります。この道は自動車が来ない安心はとてもうれしいです。ただ陸橋のあたりは段差が出来ていて、坂道プラスその段差で自転車にとっては、走りにくくなっています。

昨年はこの春から幼稚園に行っている下の男の子を連れての自転車だったので、松見公園で遊んだり、鳥の声や姿を子供と共にみつけたり、ペダ

ルをこぐのも力がいる運転でした。これもいい思い出になるのでしょう。

7月からはその男の子も補助なしの自転車に乗れるようになったので、平日はお姉ちゃんと3台で走ります。去年はバタバタと音がして顔に向かってくるように飛んだトンボが（小道で）今年はいないねとか、子供も走りながら自然に触ってくれているのがうれしいです。歩くことが一番いいのはわかっているのですが、ここはどこへ行くのも距離がありすぎます。車でビューンと行ってしまうのではなく、自分の足でこいで進む自転車が私は大好きです。

『自転車の街つくば 探訪レポート』

～四季の並木めぐり～

加藤 操（つくば市春日）

つくばの街を南北に横ぎるペデストリアン。歩行者と自転車のためだけに作られた道路はさすが「自転車の街・つくば」のメイン・ストリートにふさわしく、自転車で通るにはうってつけの道といえるでしょう。きちんと整備されていて走りやすく、信号はないし車の心配もありません。私のように車を持たない学生にとっては、つくばの中心街と大学とを結ぶ大動脈として、普通の一般道よりも余程馴染みの深い道となっています。

いくつもの公園や広場を結び、道沿いにはエキスポセンターや図書館・美術館、ノバホールなどもあるペデストリアンは、ただ散歩道として通るだけでも楽しく、よく晴れた日曜の午後なんかに、行く所もお金もない学生にとっては良い憩いの場となっています。

また「人工的」としばしば言われるつくばの街並みにおいて、自然のやすらぎをあたえ、四季の移り変わりを教えてくれる並木の存在も見逃せません。美しい並木の鮮やかな彩りは私達の目を一年を通して楽しませてくれます。車やバイクなどでは一瞬で通り過ぎてしまうちょっとした並木道も、自転車なら大丈夫。舞い落ちる花びらや落ち葉の中を季節の風をきって走り、疲れればすぐ自転車を停めて道沿いのベンチで一休み、なんてこともできてしまいます。そこで今日は、ペデストリアンの近くにある自転車で行ける、季節ごとのとっておき「おすすめ並木スポット」をご紹介しましょう。

まず春といったら、何といっても桜。桜の名所はいくつもありますが、お薦めは筑波大学の追越宿舎東側から平砂宿舎の北側まで延々と続く桜の並木です。芝生にござを広げてのお花見もいいですが、舞い落ちる花びらの中を自転車で颯爽と春風を切っていくのもいいものです。夜になれば、街灯や店の明かりにほのかに浮かび上がる夜桜も楽しめます。「平砂トン

「ネル」を西にぬけて春日4丁目にはいれば、北にまた変わった趣の桜の並木を楽しむことができます。例年4月の上旬頃が見頃ですが、筑波大学を北に行けば行く程桜の開花時期が遅くなり、北の一の矢宿舎の桜にいたっては、開花時期が1週間も遅いとのデータもあります。まずは御照覧あれ。

夏のおすすめ並木は、西ループの平砂宿舎前バス停の北側にあるゆりの木通りです。初夏の若葉から夏の盛りにかけての緑が美しく、道路の上を鬱蒼と覆ってしまう程よく繁り、そこからの木もれびは実に見事なもので。暑い夏の昼下がりでさえ、木陰は涼しく風は爽やかで、ペダルをこぐ足も思わず軽やかになってしまいます。自転車を停めてしばしたたずめば、蝉の声もひとときわ大きく、街の中にいることも忘れてしまいそうです。

そして、紅葉（黄葉？）の秋にはいちょう並木。平塚線を西に向かえば、黄色く染まつたいちょうの並木が延々と西大通りまで続きます。西向きに下り坂になっているのでペダルをこぐ足も楽チンで御機嫌です。夕暮れの時刻には、真っ赤な夕陽と茜色に染まった夕焼け雲に黄色いいちょうがよく映えて、まるで一枚の風景画のよう。風に吹かれてひらひらと舞ういちょうの葉が秋を感じさせてくれる道です。

冬になって、すっかり葉が落ちてしまっていてもぜひ見てほしい並木があります。それはポプラ並木です。ペデストリアンを北上し、筑波大学構内をぬけ、一の矢宿舎にさしかかる橋の上から見るポプラ並木は、冬の厳しい筑波おろしにも負けず、真っすぐに空に向かってのびていて、自然の強さを教えてくれます。いくら寒いからといって、こたつの中で猫のように丸まってばかりいないで、木枯らしにむかって自転車をこいでみましょう。あっという間に体中がぽかぽかになること受け合いで。

いかがでしたか？ここに紹介したのはほんの一部で、つくばには本当はもっといろいろな絶好の並木スポットがあるのですが、それは私だけのヒ・ミ・ツ。みなさんも自分だけの「並木スポット」を探してみて下さい。きっと身近にたくさん見つかるはずです。そうしたら友達や家族の人と一緒にサイクリングに出かけてみましょう。きっと、もっと楽しい「つくば・自転車ライフ」が広がりますよ。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

～ゆりの木通り～

神谷 栄子（つくば市吾妻）

ゆりの木通りをサイクリングしていると、両サイドから迫る葉っぱのアーチを自動車で、あっ気なく通過してしまう人が気の毒に思えてしまう。

つくば市天久保の松見口から追越、平砂へと続く並木道が、ゆりの木通りと呼ばれている。

筑波大学の構内へと続いている道だから自動車だって多少スピードをダウնさせている。

でもやはり自動車で通過してしまっては、ゆりの木の葉音が聞こえない。

つくば市には松見公園から二の宮公園を経て赤塚公園へと一直線に通じるサイクリングコース、つくば公園通りもある。

筑波万博の名残のエキスポ大通り、サイエンス大通りも広々としていてサイクリングには好条件だ。

でも四季折々、毎日の忙しさについ木々の葉色の変化までも忘れかけている私の心を、この、ゆりの木通りは和らげてくれて、しかもそのつど新鮮さを感じさせてくれる。

ゆりの木には一本一本、大人の目の高さ辺りに青い小判形の番号札が針金でくくり付けられてある。

片道87本、両サイドで174本のゆりの木が春は薄緑色、春は強い緑、秋は黄変し、頭上高くアーチを形造って、見上げる人に季節のうつろいを語りかけて来る。

「大学の中の木には全部番号札が付いているのかな？」と言ひながら小学生の子供2人を先頭にして大学構内を一回りした、そんな一日もあった。

ゆりの木通りから続くイチョウの木には水色の番号札が付いているのを見つけた時、子供達は、「見つけた！付いているよ！」と歓声をあげた。

「自動車で通っていた時は、気が付かなかったのにね。」と、3人で新し

い発見をした気分で浮き浮きしていた。

サイクリングは一列に、子供達のペースに合わせていると、すれ違いざまに、「こんにちは！」と声をかけて走り抜けてゆくジョギングの女性や、「ハロー！」と自転車のペダルを踏みながら、にっこりしてくれる留学生に出会ったりもする。

日常雑多の中から抜け出して散歩してみたいという時は、ゆりの木通りへのサイクリングが一番。

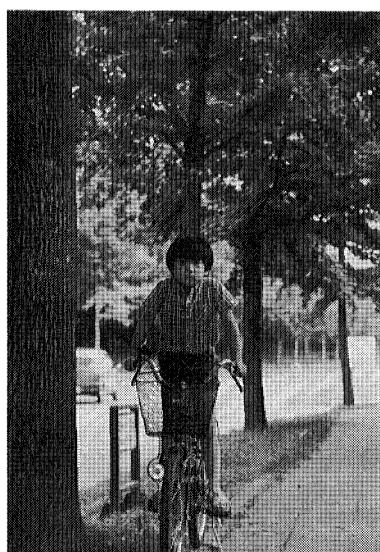
自転車の行く手に、ゆりの木の葉がヒラリ落ちて来る秋の日のサイクリングもいいけれど、これから季節は、雪がうっすらと積もったゆりの木のアーチも、その白さが目にしみてまぶしい。

あっ、それから12月の末にこんなこと也有ったのを覚えている。

「サンタクロースって、本当はないんだよね。」と言い始めた小2の息子と、ゆりの木通りへ自転車で出かけて行った。

ゆりの木のアーチを行って、戻って来た時には、私の中での戸惑いも消えていた。

自転車を止めて、「やっぱり、いるのかな？」とポツリもらした息子の言葉が、ゆりの木通りと、ハーモニーしていた様に感じた一コマだった。



ゆりの木通り

ゆりに木に付けられた青い小判型の番号札

～小2の時の息子～

『映画は自転車に乗って』

澤口 とし (つくば市並木)

私の自転車はいわゆる、ママチャリで、しばらく子どもを乗せてよく走っていました。買い物へ、公園へ……と。やがて、子どもも成長して、それぞれ自分の自転車を持つようになり、今は私一人で乗っています。後ろ座席につけた子供用椅子は買い物用籠となって。相変わらず移動用の自転車ですが、密かな楽しみにも使われています。それは2~3ヶ月（毎月！とはいかない）に一度、映画を観る為に！お天気もよろしく、用事もなく、そんな日心も浮き浮きと出かけるのです。目的地は西武デパートの中にある「キネカ筑波」へ、私の自転車速度で約20分かけて。

今の時代は、ビデオの普及やら衛星放送で、名画から新作ものまで簡単に見られますが、私は数ではなく、映画館で映画を観たいのです。あの映画館独特の雰囲気に包まれて観たいのです。私が行く時間はたいてい、平日の10~11時に始まる初回の午前中です。勿論空いているのですが、観客がたった私一人なんてこともあり、これで映画館やっていけるのかな……と深く同情してしまいます。

以前キネカは、マイナーな映画をよくやってくれてました。「八月の鯨」「ベルリン・天使の詩」ヘップバーン特集など。この頃ロードショーものばかりなのも、判る気持ちがしますが、やはり地味でも良いものを上映してほしいな……。無理かしら。

また、私はせっせと招待券に応募します。当たると勿論タダ！嬉しい限り。

とにかく、今日この映画を観るのだと思う朝の嬉しいこと。私の自転車コースをお教えいたします。

私は並木2丁目、並木小学校の隣りに住んでいます。東大通りの信号を渡り、工業技術院研究所の敷地内を抜けさせて頂き、洞峰公園そば遊歩道にてて、遊歩道をセンタービルの方向へと走っていきます。春の頃、洞峰

公園、遊歩道の並木道、桜の美しいこと。自転車で走らせていくと、桜の中のトンネルをくぐっていくという感じ、包まれていくのです。枝が頭すぐ近くまで垂れ下がり、花に手がとどきそう。そして散り際の美しさがなんともいえません。あとからあとから、ハラハラと桜の花びらが頭の上から降ってくる中を、やはり走り続けるのです。極上の幸せの極み。この並木道、夏は若葉色、秋は染まっていく葉を感じ、更に風の色まで感じられます。二の宮公園、竹園公園、大清水公園と通り過ぎ、やがて目的地、筑波キネカへ。大きな坂を2回程越えますが、信号もないし、あっという間に着いてしまいます。途中、一人でもくもくとジョギングしている人、年配の御夫婦で散歩している人などに擦れ違います。いいなあと思ってしまう。

さて、一人で心地よく映画を楽しんだ後は、時間があれば勿論すぐにひき返しません。そのまま市立図書館へ行き、本を返しました借りて、アルス内にある「カフェーベローチェ」で一服。コーヒー紅茶180円、ケーキ250円と安くてなかなかおいしい。三井ビルの並びにある公団住宅の一室にある、「イエロー・マチコ・ツリー」にある、小物、服、沖縄ガラス、砥部焼を見ていくのも楽しいものです。また、遊歩道と西大通りの並び、真ん中にある道を走っていくと、花屋、「フルール詩季」があります。お花も素敵だけど、小物もなかなか洒落たのがあります。隣の「コットンチャック」を覗くのもいいかも。

「モルゲン」でおいしいパンを買って（時間帯によって、数がないこともあります）同じ並びの「シーゲル」のケーキも好きだけど、特別の時以外は買わない！）また工技院の中を通り、工技院生協の中で、買い物をしたりします。この店内の本屋さん、本が1割引きなので、よく本を注文します。少し時間はかかるけど安くなるので助かります。

工技院職員用食堂には、友人と入って食べたことがあります、メニューが豊富で安くておいしい。といううちに我が家へ到着。素敵な映画をたった一人で観て楽しんで、その余韻を楽しみつつ自転車のペダルをゆっくりと走らせ、にこにこと帰ってくるのもいいものです。

『つくばを自転車で走る楽しみ教えて』

森谷 洋子（つくば市並木）

最近はバードウォッキングや野草・花を見るという自然探求がさかんになってきました。樹木ウォッキングを楽しみながらサイクリングはいかがでしょう。私は並木4丁目に住んでいるので東大通りを中心に往復30分から1時間位の所要時間で季節の移り変りを楽しんでいる場所を書きました。

セブンイレブンより横田酒店の前の用水路にそって梅が小道（自転車が通れる）をはさんで両側に咲く、白梅、紅梅、しだれ梅と順々にそれは見事です。東大通りをぬけさらに用水路をたどって梅園公園に行き公園内の梅を見る。並木ショッピングの前のバス停は両側こぶしです。交流センターのつつじのまわりの植え込みもこぶしで囲まれている。梅園団地内はこぶしの並木が多い。こぶしが咲き始まると春が来た喜びを感じる。桜は農林団地内が素晴らしいがサイクリングをしながら楽しむには並木大橋のあたりから宇宙センターに向い二の宮から竹園公園に行くコースが桜並木を両側にみて満開になるのを待ちこがれて2~3回走る。谷田部東中学校、茗渓学園の前の桜並木も美しい。並木中の前のイチョウや並木団地のポプラをみて近隣公園のわきを走り工技院の正門から厚生施設の建物前までにかけてあるイチョウは新緑も良いが紅葉も良い。はらはらと落ちる中をサイクリングするのはロマンチックです。東大通りのとうかえでの紅葉をみて環境研の正門から西大通りのプラタナスの紅葉をみる、同じ時期でありながら色、形、こんなにも違った感じにうつるのかと思う。こうして季節がくると必ず行ってみたくなる、ねむのきの並木（竹園）、アカシアの並木（二の宮）、ゆきやなぎの並木（二の宮）、金もくせいのかきね（そばの丸花）、赤塚公園内のしだれ桜、藤だな、花水木。

健康と美容をかねて樹木ウォッキングをしながらサイクリングを楽しんでいます。

3. おすすめコース

——今度の週末、天気が良かつたらぜひ——

『自転車つくば紀行小さな旅』

池上 敦子（つくば市吾妻）

「わあ！いいお天気！」

カーテンを開けて思わず叫ぶ。ピカピカの朝。振返ると夫は、眩しそうに布団に潜り込む。構わずはぎ取る。

「さあ！でかけるぞお。サイクリング、サイクリング。」

夫は歩き始めたばかりの娘を背負い、私はリュックを背負う。目指すは「つくば道」。今日は、長距離。初めてだけれど、新しい、フレッシュオレンジのマウンテンバイクならぐんぐん走ってどこまでも行けそう。

吾妻2丁目から出発。まずは気持ち良く「つくば公園通り」を走ってみる。

「うーん。最高ねえ。」

娘が足をパタパタさせて、喜んでいる。この道は、本当に良くできている。信号はナイ。階段はナイ。車は、通らナイ。それでいて、緑はある。ベンチで休める。四季折々の彩りが美しい。大好きな道だ。

松見公園を過ぎて、東大通りへ出る。

「先に行くぞ。」

夫がスピードをあげる。娘の小さな手が、その肩につかまる。私も頑張る。頬に当たる風が心地良い。筑波大を越え、旧道に入る。

細い道の両側は、古い大きな日本家屋。白壁の倉。柿の木のある広い庭。不思議な赤い壁の屋敷。古い床屋とよろず屋が町らしさをかもし出す。まわりは、広い広い田畠。風が渡り、鳥が鳴きながら空に消える。自給自足で、ここだけの生活をずっと守り続けてきたかのように、静かに豊かに平和に見える。腰の曲がったおばあさんが、ゆっくりゆっくり手押し車を押

して歩く。すれ違った、リンゴのようなホッペの女子中学生が、かわいい。

細く続く道を抜けると、広い通りに出る。『北条仲町』と書かれたアーケードをくぐる。なにやらおもしろそうな通り。キヨロキヨロしながらゆっくり走る。土壁のタクシー待合所。お寿司屋さん。そして、ここは……何のお店かな……。ガラス戸の中は暗い。なぜか気になって、おそるおそる入ってみる。ショーケースの中には、カステラ、ドーナツ、食パン、あんパン。奥は、そのままパン工場。職人かたぎのおじいちゃんとお父さん。親子二代で黙々とパンをこね、焼いている。

「わあ、おいしそう。」

どれを買おうか迷ってしまう。

「寒いから閉めてください。」

職人に愛想は要らない。

「ドーナツください。」

すぐそばの八坂神社で手を合わせ、おやつにする。あまりのおいしさにホッペが落ちそう。甘いもの大好きな娘も感動しながら頬ばっている。今度来たらケシの実のたっぷりかったまるいカステラ、買ってみよう。

さあ、元気がでた。また出発。

小山を越え、広い田畠を走り抜ける。正面に、大きな大きな筑波山を見ながら。

目的地は、もうすぐ。と、『右、蚕影山神社』の看板にひかれて、つい小路にそれる。つき当たりまで走ると、由緒ありげな古い神社。自転車を置いて、長い石段を登る。息がきれる。途中の休憩所は、ガラス戸も割れ、少し恐いムード。着いた神社の脇には、繭でかたどった鳥居の額が飾られている。名前のとおり、蚕の神社か。苔むして、高い樹々におおわれている。昔は、このあたり、絹までつくっていたのだろうか。足の長いクモが私達の足に驚いて逃げていく……。昔って、いったい何時頃のこと？

ここにもそこにも、歴史が息づくつくば。懐かしい風景が広がるつくば。車で、あっという間に走り去ってしまうのは残念。歩いて行くのは、ちょっと遠すぎる。知らずに学園都市の中だけにいるのは、あまりにもったいない。さあ、あと一息。筑波山の登り口まで一気に行こう。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

太田 道男（つくば市並木）

『花室川沿いの田園道』

私は、並木から筑波大学へ通勤している。晴れた日に時折自転車で通う。並木の官舎街も、大学のキャンパスも、整然とはしているが、人工的である。それに比べると、花室川沿いの田園が、別世界のようだ。

並木の住宅街を縦断して、遊歩道を北へ抜けると、機械研究所のテニスコート脇に出る。ウッディな造りのレストランが、突如現われびっくりするが、その隣の林の向こうに田園風景の広がりが感じられる。何かに吸い込まれるように、畑の中の道を花室川へと向かう。

花室川沿いの農道は、年々整備が進み、拡幅され舗装もされている。広々とした田園風景の中をゆったりと走ることが出来る。とはいっても、陽当たりも良ければ、風当りもよい。夏は路面からの照り返しが強く、冬は北風の冷たさを思い知らされる。おかげで、春秋の爽やかな走りは、格別だ。

花室川両岸の道は、西岸の方が広く走り易い。眺めも牧歌的だ。逆に東岸は道も細く、曲がっていてやや遠曲がりだが、四季の草花が車輪に絡んで来て、身近な自然と対話をしながら、学園の建築を遠望することになる。

並木から、花室の学園線までは、川の両岸に古い家、新しい家が散在して、人の臭いが結構濃い。学園線を越えると、川沿いの平地の幅も広くなり、全くの田園風景となる。はるかに連なる筑波連峰が、風景を引き締めている。足元では、芝生が畑毎に微妙な色の変化を競い合っている。

この道は、土浦学園線の自動車通りをトンネルでくぐるので、自動車の喧噪には、あまり会わずに走り通せるのがよい。自分の心を感じながら走れて、大切な時間を持つことが出来るわけだ。空を見上げても良いし、ペダルを漕ぐ足元を見つめてもよい。傍らの小さく涸れそうな泉に、オアシスと思うときもあれば、休耕田の真ん中で虚勢を張る大きなカラスと、に

らみ合ったりすることもあった。

学園線からはるかに北上すると、新しい瀟洒な洋館が見え始め、浄水場のエキゾチックなゲートが現れたりして、ふと心が遠い国の空へ飛んだりする。それも東の間、やがて学生のアパート群に変わり、饅頭の大きな看板の向こうに大学の赤煉瓦が見えたかと思うと、道は突如、東大通りに出る。白いトレモントホテルの横を過ぎると、教室へ急ぐ学生の自転車軍団に呑込まれてしまう。(片道約8km、40分)

『つくばの街とマウンテンバイク』

手ごろな値段のマウンテンバイクが、スーパーの店先に並んでいる。普通の自転車とあまり変わらない値段である。永年、ドロップハンドルの軽快車を愛用してきた身から見ると、何とも重そうに見えたが、これを逆手にとり、脚を鍛えるためとか理屈をつけて手にいた。21段も切り替えがある割には、スピードが出ないと思ったが、乗り心地は上々。なんといっても車道から歩道への段差が気にならなくなった?のがよい。坂道をのんびり楽々登れるのもよい。何もマウンテンに行くこともない。街で乗るのにも適している。泥除け、荷台を付ければ、スーパーでの大量買いにもつき合える。

スピードの切り替えは、股ぐらではなく、ハンドル上のレバーで行うので、なんとなく頼りないが、切れ味もよく、確実である。このディレイラーや、車輪・ペダルの軸周りは、SHIMANO製であり、永年付き合ってきたので、信頼感がある。つくばの街では、日常的に使用するのは、せいぜい5段ぐらいであるが、どの5段かは個人差があるだろうから、結局段数の多いものが欲しい。

なんといっても自転車で重要なのは、乗り心地。乗り心地には、車輪の影響が最大。リムは、ARAYA製で、これも長い付き合いがあるから、申し分無い。マウンテンバイクで気になったのは、タイヤである。あの華々しいトレッドのお陰で、滑らなくなってしまったのだろうが、舗装面を走るとき不快な振動を感じる。うるさいほどの時もある。タイヤの硬さが問題。そこで、トレッドの凸凹に手で触って、柔らかく感じるようなタイヤに交換したら、この振動が感じられず、まことに調子がよい。市中派は、なんとしてもタイヤにだけは、気を配りたい。パンクはしないのだろうが、修理

用のスプレーを忍ばせておく。

乗り心地には、またサドルの硬さと高さが大きいに影響する。サドルをスプリング付きの普通車のものと取替えて、GOOD。高さは、脚が適当に伸びるように。自転車の国オランダの人からみると、ほとんどの日本人が、膝を曲げたまま自転車を漕いでいるのが、おかしくてたまらないとのこと。

町中を走るには、ベルが必要だ。ティンクラーベルの澄み切った、一発の音がよい。夜中を走るには、ライトが必要だ。リムドライブの擦れ合う、静かな音がよい。アベックで走るには、後ろにも目が必要だ。バイク用のミラーを、ハンドルに取り付けた。すると、つくばの夕焼け空が手元に届いた。

『並木から万博公園へ』

並木から、万博公園まで、気持ち良く、静かな道を走りたいと思ってトライしてみた。小野崎の田園地帯、山中・柳橋の水田地帯を経由する。この散策ロードは、新旧の景色の交代が何度もあって、時間の経つのも忘れてしまう。

並木から、公園通りに出て、洞峰公園経由、または、二の宮公園から南大通り経由で、とにかく西大通りに出て、小野崎に入る。西大通り沿いの木立がタイムトンネルになっていて、急激な時代の変化を感じる。しかし開発のおかげで、年々タイムスリップも、切れ味が悪くなってきつつある。明るい田園地帯を、適当に右往左往しながら西へ向かうと、松代・手代木の官舎街が見えてくる。官舎街の歩道は、真っ直ぐだが、木陰なので夏でも涼しい。

松代4丁目またはその近くの交差点で、牛久学園線を渡って、またタイムスリップ、赴くままの道を選んで、おおよそ西へと向かう。松代から谷田部へ向かう交通量の多い車道に出るころには、自動車のスピードが恐ろしく感じられ、のんびりとした自分に気付く。車道の向かい側に適当な小道を見つけてから、“島”へと渡る。その小道は大きな木立沿いかも知れないし、小さな疎水沿いかも知れない。

島の村落を抜けると、辺りの様相は一変し、蓮沼川沿いの田圃の向こうに、キャノンの大きな研究棟が惜しげもなくその姿を見せている。顔を左に背けるようにして、蓮沼川に沿って南へ、つまり下流の方へ走ると、サ

イエンス大通りを横切る。この交差点の角には、自然食品を扱う店みずほがあり、飲物も置いてあって、サイクリストからみれば、オアシスでもある。

ここから柳橋、平とつづく蓮沼川沿いの水田地帯は、小高い丘陵に挟まれた別天地で、つくばの水郷ともいえるところである。柳橋から平に向けて、柔らかくカーブした流れに沿った水田には、白鷺が静かに憩い、訪れる人を先へ先へと誘う、不思議な光景である。

北側の丘の上は、西部工業団地なのだが、森のおかげで建物は見えない。中央の万博記念公園では、たまに外に出たのであろうか、見知らぬ人が大勢で、興奮気味に騒いでいる。トイレを借りて、また静寂を求めて河原へと下る。

蓮沼川は、平で東谷田川と合流し、谷田部へと向かう。東谷田川の西岸は、鬱蒼とした森であり、時折、梢を渡る鳥の姿が見えるくらいで、昼なお暗く、分け入る氣にもならない。未知のスペースとして心に留め、引き返すことにする。

帰路は、心に残っているチェックポイントを目指して逆にたどる。同じ道はあまり通りたくないのだが、通りたくても、不思議と同じ道が見つからないのが田舎道だ。 (片道約10km、1時間)

『つくば・土浦コミュニティロードの提案』

根本 健一（つくば市吉瀬）

春夏秋冬の色合いを包む大気。

その匂を体いっぱいに受けながら意気に開くまにまの風景。

自転車はそんな、そこはかとない詩情を感じとることができる格好の“アクションツール”といえます。

ここに、ペダルをふめば開ける地域パラダイムの扉を紹介いたします。

筑波研究学園都市と土浦。どちらも県南の中核都市としての集積がありますが、その成立ちや現在の都市の様相には大きな違いがあります。現代都市整備のもとに成った学園都市、中世都市整備のもとに今日に至る歴史都市土浦。そして、この両都市をゆるやかに面でつなぐ農村が間にあります。この3光景をもって、地域を構成する特質的情景としてフィールド博物館とみてとれます。

こうしたフィールドを現代の時間観念でたっぷりと一覧しようとするとき、そこに自転車が当り前のようにあります。

さあ、すがすがしい緑と人の営みが息づくその道中にあなたもペダルを踏み入れてみましょう。

別紙のイラストマップは私共で作成したものです。

つくば—つちうら Community Road

ここにご案内する道路は、自転車の専用道路ではありませんが、比較的通行量の少ない散策、サイクリングなどに向いた道路を取り上げてあります。近隣自然と地域の文化財をお楽しみ下さい。



『自転車のあるつくばの楽しい生活』

藤沢 宏 (つくば市吉来)

真っ直ぐに伸び、何車線もある大通り、植えられてから20年を経て見事な枝振り、葉振りを見せ、季節ごとに色合いを変える街路樹、そして、その優れたデザインを競うかのような真新しい建築群。つくばの街は、都市計画された素晴らしい環境と周辺の田園地区との見事な調和により素晴らしい街となっています。

そして、このように素晴らしいつくばの環境にいちばんマッチする乗り物、それが自転車ではないでしょうか。そして、つくばがほとんど坂がない、自転車が安全かつ快適に通行できるように遊歩道（ペデストリアン）が縦横に整備され、また、多くの幹線道路には歩道が設置されています。また、一歩周辺部に目を移せば、広々と広がる芝畠や田んぼをぬうように舗装された農道が、サイクリストたちを呼んでいます。

つくばはサイクリングコースの組み方が自由自在。走る人のペースにあわせて、公園を巡るコース、史跡を巡るコース、自然を楽しむコースなどさまざまなコースを組むことが可能です。

そんな中、今回はつくばを満喫できるサイクリングコースを2つご紹介します。これらのコースは遊歩道以外の道路も走りますが、よく整備されていますので安全。ロードレーサーやマウンテンバイクを持ち出さなくて、普通の自転車でもOKです。

まず、『つくば公園通り』を中心に、市内の公園を結ぶ定番コース。スタートはどこでも良いのですが、公園の老舗、『松見公園』にしましょうか。松見公園をスタートにつくば公園通りを南下します。エキスポセンターを左手に、中央公園を通り、つくばセンタービルに入ります。そして、大清水公園、竹園公園、二の宮公園、洞峰公園と南下、つくば公園通りは、赤塚公園までの約5キロメートルの道程ですが、赤塚公園まで行かず、洞峰公園から西大通り、学園牛久線を横切り、手代木の集落を通って、柳橋

交差点から、サイエンス大通りを北上、科学万博記念公園につきます。そこからまた、北上し、東光台工業団地を抜けると、そこは『豊里ゆかりの森』。ハーブ園、昆虫館を見学した後は、平塚学園線を通って、筑波大学構内へ、そして、松見公園へ戻る約20キロメートルの行程です。坂はほとんどありませんから、ギアのない自転車でも安心です。途中休憩しながら走っても半日でゆっくり回れますので、ご家族で水筒を持ってどうぞ。どの公園にもトイレは完備されていますので安心です。

さて、もう一つは市街地を離れて、つくばの大自然を味わうコース。市役所大穂庁舎を東に出発し、農免道路を北上、できたばかりの自転車専用道路『つくばりんりんロード』を通って北条の市街地へ、日本の道百選にも選ばれている『つくば道』を北上し、交差点を左折して大貫の県道下館筑波線を横切り、桜川にかかる木橋をとおり中晉間から市街地を南下、国道125号をわたり、田んぼの中快適な道路を走ると筑波北部工業団地とテクノパーク大穂の2つの工業団地に到着。工業団地内には筑波北部公園や大久保公園などがありますが、工業団地そのものが大きな公園のよう。団地内の快適な道を一走りしたあと、一路市役所大穂庁舎へ帰ります。こちらは約25キロメートルの行程とちょっと長めなのであまり無理せず、小田城跡、大池公園、蚕影山神社など周辺に寄り道して、つくばの歴史にふれながらサイクリングを楽しんだらいかがでしょうか。

以上、代表的な2コースをご紹介しましたが、皆さんもお弁当をもってぜひ、お出かけください。



科学万博記念公園にて



つくば公園通りにて

『自転車で楽しむつくばの風景』

古川 恵美子（つくば市吾妻）

筑波研究学園都市は山の手線に囲まれた範囲に相当する面積があり、自転車は生活の足として欠かすことができません。

つくばの都市部においては住宅街の中はペデという歩道が整備されており、歩行者優先の街づくりがなされています。特に、松見公園から中央、大清水、竹園、二の宮、洞峰公園を経て赤塚公園にいたる通りは公園通りと呼ばれ、この通りを散歩するだけでも、桜の花、新緑、紅葉などの四季の移ろいを楽しむことができます。

ペデは歩行者用道路ですが、自転車で走ることもできます。朝夕には通勤、通学のカバンを、日中は買い物かごを、また、休日にはテニスラケットを持った人たちの自転車でにぎわっています。広い学園都市ではペデは自転車用道路としても活用されています。

一方、学園都市のまわりは、北には紫峰筑波山、東には霞ヶ浦とそこに注ぐ桜川、西は利根川につながる小貝川、南に牛久沼と自然環境に恵まれ、見るべきところが数多くあります。学園都市からこれらの場所へは田園風景がつづいており、自転車で出かけるのには格好の環境となっています。

学園都市の主要な道路は複線化され、歩道は街路樹や縁石により車道から隔てられています。このため、車は制限速度を越えるスピードで行き交っていますが、自転車は歩道を安全に走ることができ、遠出をする場合にこの道を利用すれば迷うことなく目的地に着くことができます。

しかし、私などはそばを走る車のスピードや排気ガスに恐怖心を覚えるため、出かけるときはできるだけ車の通らない道を選びます。主要幹線、例えば東大通りなどを少し離れると、そこには旧町村の家々が立ち並び、田畠の中を整備された農道が走っています。そこに広がる風景は変哲もない田圃ですが、水を張ったばかりの水田から、だんだんと緑色が濃くなり、ついには黄金のみのりに至るまで、季節感あふれる表情を見せてくれます。

また、農家の庭先の草花や木の色づきからも季節を感じとることができます。旧道や農道は車が少なくて安心して走れるばかりでなく、楽しみながら走ることのできる道といえるでしょう。

我が家生活にとっては、自転車は欠かすことができない大切な乗り物です。日常の生活においては、スーパーなどでの買い物から片道8キロメートル余りの夫の通勤や土浦へ遊びに行くことまで、お天気の許す限り自転車を利用しています。また、お休みの日には家族揃って遠出をしますが、最近は子供達が親離れし、夫婦だけでサイクリングを楽しむことが多くなっています。

ところで、秋のサイクリングとしておすすめはなんといっても筑波山です。まず、筑波大学の中あるいは東大通りのわき道を通って一の矢神社まで行き、田園の中の一本道を小田橋まで抜けます。小田橋は桜川にかかる小さな橋で、ここから筑波山を望む風景は絵になります。小田では小田城址、長久寺の石塔などの歴史をつつみこむ落ちついた佇まいをながめます。農道や旧道を経て北条の大池にいたり、関東ふれあいの道にしたがって筑波山をめざします。体力に余裕があれば、ゴルフ場をめざして山道を登り、みかん狩りを楽しむこともできます。

北条、神郡、臼井を通るつくば道は筑波山への参詣道ですが、アップダウンがあって、道幅は狭く、自転車で走るには楽ではありません。特に、筑波山の麓からは殆ど自転車を押しながら歩くことになります。この途中、石の鳥居を目印に登っていくと、右手に大きなホテルが見えます。つくば温泉ホテルでつくば市で唯一の温泉があり、宿泊客でなくても利用できるので、ひと休みして疲れをいやしましょう。

石の鳥居のあたりに自転車を置いて筑波山神社におまいりした後は、つくば温泉ホテルと逆方向の道を帰ります。汗だくになって登ってきた距離を一気に下って、まっすぐな農道から筑波山を振り返ると、中腹に温泉ホテルが見え、よく登ったものだと満足することができます。また、漆所を過ぎ、車で渋滞している125号線を見ると、自転車でやってきてよかったと思わずにはいられません。

ところで、私の自転車はいわゆるママチャリで、3段変速付きですが特別の装備はしていません。夫はサイクリング車ですが私のペースに合わせて走ってくれるので、サイクリングを楽しむのにこの自転車で少しも不便

を感じていません。

サイクリングをしていて楽しいのは、まず、目的地に到達したときの満足感と自然を肌で感じられることです。さらに、地元の方に道をたずねたりして、地域とのふれあいが得られ、地図や観光案内にない名所を見つけることもうれしいものです。皆さんも、今乗っている自転車でつくばの風景を楽しみませんか。

4. 家族で楽しく

——マイカー旅行の目先を変えて——

『“自転車に乗ってベルを鳴らし”』

齊藤 具子（つくば市山中）

この4月に、つくばに引っ越してきた。科学万博が開かれた所のすぐ近くだ。科学万博には仕事で毎週のように来ていたけれど、こんなに近くに住むことになるとは思わなかった。人でいっぱいの科学万博会場を、うす紫色の自転車で走り回り、仕事をした。今、その跡地の工業団地の中や、万博記念公園の中を、自分のマウンテンバイクで走る。どこにどのパビリオンがあったか、もう思い出せないけれど、岡本太郎のモニュメントは確かにあったし、ステンレス製の銀ピカの門も確かに会場で見た。この間は、子供の運動会まであの銀ピカの門の下でみることになった。何だか不思議な気分。

なにしろ我が家は子供が4人もいるので、勝田にいる時も、自転車は4台あった。大人用2台。子供用2台。つくばに来て、一挙に3台ふえて今7台。中学に入った娘、他の女の子が全員白い自転車を買ったらしいが、前から使っていた紺色の自転車で通学し始めた。「あるのに、もったいない。」私の一言でそうしたのだが、たいしていやがらずに通っている娘にも感心した。でも行き帰り坂があり古い自転車では危なそうだった。ある時は科学部の活動で、大角豆の方を走っている娘達の一行をみた。あんなに遠くまで古い自転車ででは大変そうなので新しい自転車を買ってやった。皆と同じ「白」ではなく、また「紺色」を。一斉に同じ「白」という不気味さを知ってもらいたい、というのは表向き。安い「白」がなかったのだ。ギア付きだったが、学校では禁止とかで、ギアをはずして乗っている。ギアがあれば坂道では楽なのに。

小5の息子は、自分の自転車はもう小さくなり5才の弟にゆずり、マウン

テンバイクを手に入れた。赤と青のストライプのアメリカ製の派手な奴。つくばに来てすぐできた友達の家や、ソフトの練習にいくのに大活躍している。サドルを高くしてサーカスの曲芸のようにして乗っている。母の私は、もう足が届かない。

そして娘の自転車を買いに行った時みつけたマウンテンバイクを、^{わたし}公用に買った。濃い紫。時々、公園へ乗っていく。夫は、2才の娘をベビーチェアに乗せ、前のカゴにはシェルティを入れ、いわゆる「ママチャリ」でいく。うちの場合、「パパチャリ」かな。もちろん私と交替する時もある。

娘が前に使っていた紺の自転車は、夫が、筑波大の中を移動するのに使っている。駐車場から研究棟まで遠く、他への移動も、何しろ広くて大変なので、重宝しているらしい。

5才の息子が乗らなくなった黒の子供用自転車は2才の娘の成長を待っている。

5才の息子は、一回り大きい自転車になかなか乗れなかつたが、ある朝、ふいに乗れるようになり、夕方には、もうトンボのようにスイスイと飛び回っていた。子供が何かができるようになる瞬間は、いつ見ても見事だ。

車だと遠くに感じるセンタービルから、図書館、そしてエキスポセンターまで、自転車で走るとすぐで、「こんなに近かったのか」とびっくりしてしまう。つくばには、車の世界とは違う、もう一つの世界があるようだ。時間と空間を超えた別の、自転車の道だ。まだまだ未知の道があるようだ。もう少しつくばにいられたら、大小さまざまな自転車と「パパチャリ」の計5台で走ってみたいと思う。そのうち、計6台で走れる日が来るだろうが。

ところで、つくばに来て買った自転車の請求書はあとできて、10万円以上になっていたのにはまいった。私が一番高かったのだが。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

土田 祐理子（つくば市並木）

私の愛車は、8年前私が就職した時に、通勤用にと父が買ってくれたもの。車からよく見えるようにと、父が選んだ黄色。何度となく転び、倒れ、雨に打たれた。ハンドルはまがり、かごはへこみ、チェーンは気まぐれにカタカタ鳴る。全身さびついでいるが、まだ走る。

私のこの愛車を時々使っていた主人が、その乗り心地の良さ(?)に耐えかねたのか、ついに新しい自転車を買った。そのおかげで、わが家も家族で自転車に乗ることができるようになった。とは言え、わが家の子供は3才と1才。主人の後ろに長女、私の前に二女を乗せるだけなのだが。

もともと私は、車よりは歩いたり自転車に乗ったりして体を使う方が好きだ。特に自転車は、短時間で長距離を移動できるのがよい。

3年前つくばに来た時は、長女が生まれて間もなかったので、私の行動範囲はショッピングセンターと家との往復に限られていた。休日の朝、主人と子供がまだ眠っている時にこっそり布団をぬけ出し、自転車で外を思い切り走ったものだ。あの解放感！早朝のつくばは昼間とはまるで違う。空気、日の光、鳥のさえずり……全てが美しい。

私のお気に入りの道はもちろん、赤塚公園と筑波大を結ぶペデストリアン。つくばの良い所は、何と言ってもペデストリアンがあること。大通り沿いは車の騒音や排気ガスで、走っていても楽しくない。その点、ペデストリアンは静かで空気が美味しい。緑も美しい。途中、洞峰公園をはじめ、いくつもの公園を通るのがまたいい。

主人が自転車を買ってから、わが家の土曜日は決まって自転車。赤塚公園からペデストリアンを走って図書館へ。帰りは途中の公園でお弁当。大人は日頃の運動不足を解消でき、子供は公園で遊べる——一石二鳥。

学園都市は表通りは整備されているが、ちょっと裏に入ると昔ながらの細い道やくねくねした道があり、その対照がまた面白い。

いつもワンパターンでは面白くないと、先日はわが公務員宿舎のある並木の裏の旧道から、農道へと入ってみた。地図も持たず、主人の勘だけをたよりに走った。(ちなみに私は超方向オンチ)。辺り一面田んぼと畑。稲の乾いた匂いや、どこからか聞こえてくる祭り太鼓の音に、気分はすっかり少年時代。行けるのかしらとわくわくドキドキ走るうち、土浦学園線の下をくぐりぬけ、さらに農道は続いた。こんな道があったのね!と感動ひとしお。小さな探検と、秘密の道を見つけた喜びとで、久しぶりに気持ちが高ぶった。家に帰ってからの地図での復習も楽しかった。これぞ自転車乗りの醍醐味!

しかし、子供を乗せての走行はなかなかつらい。特に途中で子供が眠ってしまうと、こっくりする頭をうまく押さえながら走るのに一苦労だ。

子供がもう少し大きくなったら、ひとり1台で走りたい。ペースは遅くなるかもしれないが、子供にも早く自転車の楽しさを知ってほしいから。それに、何と言っても家族一緒に走りたいから。それまでわが愛車が健在だとよいのだが……。

『カルガモサイクリング』

中村 美穂子（つくば市谷田部）

「今日は、サイクリングに行くぞ！」

よく晴れた日曜日、のんびりとした朝食の後、父さんが言った。

「やったー。」と子供達。さっそく皆で準備にとりかかる。母さんは荷作り。水筒、お菓子、タオルにティッシュ、忘れちゃいけないバンドエイド……。子供達は、靴下をはいて、帽子をかぶる。父さんは4台の自転車の点検。空気を入れたり、子供の自転車の曲ったハンドルを直したり。

さあ、準備完了。まずは父さん、黒の26インチの自転車。チリンチリン。次に長男、買ってもらったばかりの22インチのマウンテンバイク。チリン。お次は次男、おさがりの16インチ、まだ上手にブレーキを使えない。チリッ……。最後に母さん、赤の26インチ。チリン。かるがもの様に縦一列に並んで出発！めざすは、万博公園、片道3kmの道のり。

出發してすぐ、^{ひがし}東谷田川の西側にある大きな森の中に入つた。うへん、昔の茨城ってこんな所だったのかと思わせる深い森。子供達は、最初、「探検だ。」といきまいていたけれど、だんだん暗くて心細くなってきた様子。森を抜け出して明るい道へ出る。地元の方の立派な家並が続き、広い庭が生垣の間の入口からチラチラと見える。大きな家だなあ。馬頭観音の碑を見つけたり、畠仕事をしているおじさんに挨拶をしながら走る。

東谷田川の小さな橋の上でちょっと休けい。父さんが止まる。キィーッ。長男が止まる。キィッ。母さんが止まる。3人が叫ぶ。「健太郎ブレーキ、ブレーキ!! 次男が止まる。ズズズズ……。

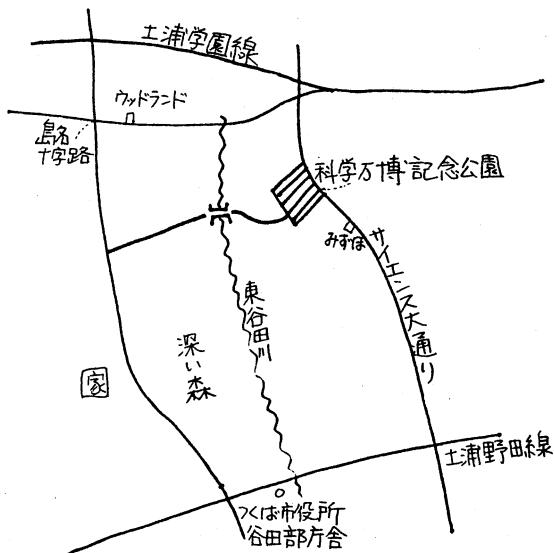
自転車を降り、麦茶を飲みながら景色を眺める。筑波山を背後に、見渡す限りの田園風景が本当に美しい。広い田んぼには実った稻が風にさやさや揺れ、畠にはとうもろこし、トマト、ナス達が行儀よく並んで立っている。子供達は川をのぞき込み、流れる水の音に聞き入っている。さて、元気が出た。また出發しよう。順番に自転車をスタートさせ、私の前を走る

3人の頭上にたくさんのトンボが飛びかっている。つくばのトンボは本当にくなつっこい。「ノジメトンボだ。」図鑑で覚えたばかりの名前を長男が叫んだ。

でこぼこのジャリ道で、次男が「足がいたーい。」と言い出して間もなく、目的地、万博公園に到着!寄り道しながら50分かかった。ベンチに座ってお菓子を食べたら、子供達は元気に遊び始めた。芝生の広場やいちょう並木の美しいこの公園は、家族全員のお気に入りの場所。しばらく遊んで、ほっちゃん池の辺を散歩していたらそろそろお腹がすいてきた。公園を後にして、ログハウスの喫茶店「ウッドランド」に向かう。ビーフカレーがとてもおいしくて、親子共々大満足。公園の近くには新鮮な野菜が買える「みずほ」もあり、消費者と生産者を結んでいる。

家の方角めざし小路を入ったら、牛舎を見つけ、子供達は大喜び。自転車を飛び降りて、大きな牛をまじまじと見つめる。この牛達の顔を彼らはまた思い出すだろう。この強烈な臭いと共に。

家を出てから約3時間の、夏の終りの小さな旅。車で動くことの多いつくばでの生活の中で、いつもは通り過ぎてしまっている色々なものが、色々な人が、自転車の上から見えてきた。



『出会いの楽しさ』

日比野 明子 (つくば市松代)

1才の息子は、自転車が大好きです。お天気のよい日は必ずといってよいほど私の愛車に乗って外出します。風をうけると本当に気持ちがいいらしく手をかざして、風がそよそよというような動きをします。そして、オーオーと歓喜の声。

やはり、私の自転車好きがしっかり子どもにもうけつがれているのかしら……。

学生時代に自転車で国内各地に出掛けていた主人の影響を受けて、私も結婚してからマウンテンバイクを買いました。町の中を走るのなら普通のママチャリ（軽快車）でよかったのでしょうか、目的は輪行して旅行にすることでした。

車のキャリアに自転車を乗せるでもなく、最小限にした荷物を自転車につけ、まずは荒川沖駅まで。その当時は、花畠に住んでいましたのでかなりの距離があったはずです。駅に着くと自転車を分解し始めます。手際よくねじをはずし自転車をたたんでいく主人を、すごいなあという気持ちでただただ眺めているだけの私でした。

袋に自転車をつめ終わると、それを肩にかけて階段を上り切符を買い電車に乗り込みます。駅の階段の多さがこんなにも大変なことを感じたのも初めてでした。目的地は福島市の高湯温泉。福島駅に着いたら、今度は荒川沖駅の時と反対の作業。組み立てるのは、分解するよりは、少し早く仕上がりました。

心は軽やかに、町の中をすいすいすべるようにペダルをこぎました。5月の風は本当に気持ちのいいものでした。そして、新緑が目にしみるようです。

けれども、スタートの快さは、そういつまでもは続きませんでした。途中雨がふりだし、カッパを着ての運転再開。これでもこのあたりはまだ

よかったです。

道がとにかく上り坂、行っても行っても、確実に上り坂。ギアチェンジをして軽くしても何の効果もありません。ついに自転車を降りて、おしながらの一歩一歩。何のための自転車でしょうか。こうなってくると、でかけてきたことまでが、恨めしく思えてきます。

あそこまで行ったら休もう。次はあそこまで……。こんな調子ですからなかなか進めません。宿泊予定のペンションの看板が出てきたときは、涙がでそうなほど悔しかったです。ましてそこからは下り坂。今度はひたすら下る、下り坂。

「やっぱりそうだったんだね。息子が下から上ってきたときに自転車のふたり連れをみかけたから、たぶんそうじゃないかって今うわさしていたよ。ああ、よかった、よかった。自転車でくるって言ってたから心配してたよ。」初めてお会いした方々なのですが、ペンションのおばさんこの言葉はなんだかなつかしい気持ちにさせてくれたのです。暖かい気持ちが心にしみていくのを感じていました。同時に、あの辛さが満足感に変わっていました。

「すごいねえ。若いんだね。おばさんも若かったらやってみたかったねえ。」夕食後、広間で水割りをごちそうになりながら、話がはずみました。自転車でやってきたこのふたりにとても興味、関心があるようで、好意的に接してくれました。

翌日、出発前にいっしょに写真をとりました。今日は、磐梯吾妻スカイラインをこえるコース。「疲れたら休むんだよ。気をつけてね。」道が曲り見えなくなるまで、手をふって見送ってくれました。手作りクッキーのおみやげつきで。

この時の上り坂の苦しみはすっかりどこへやら、その後も懲りずに自転車＆温泉ツアーペンションを計画し秋田の乳頭温泉、角館を旅しました。

子どもが生まれてからは、自転車で旅行することはできなくなりましたが、子どもを自転車の前のかごに乗せ、近くの公園や中心街の方まで足を延ばします。田んぼや畑に囲まれた道を、ゆっくりゆっくりペダルをこぐのです。思わず歌を歌いたくなります。風が心地よいのです。“近くにこんないいところがあったんだね。少しここで遊んでいこうか。”“この道はどこにでるのかな。よーし、今日はこの道で行ってみようね。”と……。

自転車に乗っていると、普段忙しく過ごしていて、感じとれなかつたことを気付かせてくれます。ひょっとして、自転車は、排気ガスも出さない、地球にやさしい環境をつくっていける乗り物かもしません。そして、あわてずのんびりやっていこうよ、という気持ちにさせ、人にやさしくなれる心をよび起こさせてくれる乗り物であるかもしれません。とは、少し大きさのようですが……。

ペンションのおばさんとは、その後も手紙のやりとりが続いていて、子どもが生まれてからも機会があったらぜひ伺いたいと思っていました。そしてこの春そうすることができました。それは、何だか、里帰りをしたような気分にさせてくれた旅となったのです。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

匿名希望

2年前、もういらないと思っていた自転車を持って福岡から越して來た。

「自転車は、つくばの必需品！」との情報を得て、急きょ、トラックに積んでもらったのだ。

1年目は、娘を後に乗せての図書館通い。少しづつ、この街に慣れていった。次の年は、妊娠、出産で小休止。そして、最近ようやく私の自転車ライフが、再開した。自転車も新しくなり、息子を乗せるために前かごも付けた。後に乗っていた娘も、一人前の顔をしてペダルを踏むようになり、少々危い2台の自転車が、そろそろと動き始めた。ベビーカーから離れると、行動範囲がぐっと広がり、外出も億劫ではなくなった。

先日、竹園から、大角豆のあたりまで、息子を乗せて行ってみた。これまで、バスを利用していたのだが、20~30分ほどしかからない。バスの時刻に縛られることもなく、車内で周りの方々に気を使うこともない。バスの中の子供づれは、肩身が狭い。息子は前の方の髪を触り、窓ガラスをなめ、吊革を握りたいとぐずる。だが、自転車ならば、その心配もない。そのうえ、子供は、自転車が大好きなのだから、天候さえ良ければ、親も子も楽しく最高だ。これも、自転車道が整備されているからこそできることで、子供を乗せていても、安心していられるこの環境は、ありがたい。ただ、細かい点には、いくつか注文もある。ひとつは、信号のあたりにある段差だ。“ガックン”とくるたびに荷物も子供も飛び上る。ふたつめは、路面のことだ。大通りに従った歩道には、自転車専用の道があるが、遊歩道を利用する場合には、レンガのところは滑りやすいし、タイルを敷いてある所ではタイルどうしの溝にハンドルをとられてしまう。今後、遊歩道を、人と自転車が共有するのであれば、この点を考えていきたい。

自転車は、燃料もいらない、空気も汚さない。騒音も出さない。究極のエコグッズだ。これを、もっと活用しよう。自転車を利用すれば、渋滞に

いらだつこともない。駐輪スペースもわずかでいい。困ることは、天候に左右されるということぐらいだろう。

家、アルス、ショッピング、だけではなく、もうすこし遠くまで、自転車で行ってみてはどうだろう。車を使う所を見直してみよう。少し疲れても、ゆったりとした時を感じながら、とても幸せな気分になれると思う。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

匿名希望

私もはっきりとは覚えていないが、確か長男が4年生の時だったと思います。秋の穏やかな休みの日に突然、長男が、「松見公園に自転車で行こう」といいだしました。私は、ビックリして、すかさず、

「いやだよ、車でいったほうが、よっぽどいいよ。松見公園でゆっくりしよう。」

といつてしましました。しかし、長男の説得に負け、自転車の旅に出かけることにしました。(少しオーバーかもしれません) 実際に、そんな気分でした。しかし、長男は4年生で問題はないのですが、長女がまだ4才で、ちょっと、松見公園まで一人で自転車に乗っていくことは無理なので、私の後ろに乗せて行きました。いざ出発してみると、長女は途中眠ってしまい、自転車から落ちそうになったりして、普段、車で行けば、15分の道のりが、1時間半くらいかかるって着いた記憶があります。しかも、長男は自転車旅行のその日のうちに熱を出してしまいました。

しかし、そんなことにもめげず、次の年も、秋の吉日に出かけていきました。今年は、お弁当まで用意して、一種の旅行気分で。しかし、この年も、長女は私の後ろに乗せていきました。今年も、また、ハブニングが起きました。家に帰ってみると長男は、体中ツツツツになっているのです。どうやら毛虫にさされたらしいのです。2年連続医者通いになってしまったのです。

ところが、それでもこりす、私は、普段車ばかりに乗っているせいか、文句を言いながらも、3回目の松見公園旅行に出発したのです。長女も1年生になり、3台の自転車で出かけました。3回目になり、3人にも余裕がでてきて、途中自転車を止めて、松ぼっくりを拾ったり、どんぐりを拾ったり……。

しかし、その近くに必ずといっていいほどガラスの破片が散らばっているのです。飲み終えたジュースビンらしき破片が……。せっかく安全のために作られた歩道が、自転車がパンクしてしまうかもしれないし、歩いている人だって危険です。

「パンクするから、気をつけて。」

と何度も大声を出したことか。私をはじめ、気をつけたいですね。

そして恒例になった4回目の松見公園旅行が、今年は、3人から2人に減りました。長男も、中学生になったからかどうかわかりませんが、「ぼくは、いかない。」

といいだしました。ちょっと寂しいけど、長女小2と二人で出かけて行きました。長女の希望もあり、今年は、コースを変え、坂のあるコースを選びました。今までのコースは平坦でしたが、この坂がなかなかのもので、長女もかなり疲れたようでした。しかし、その後そのコースを車で通ると長女が、

「おかあさん、この坂、自転車で通ったんだよね。登るときは、つらいけど、降りるときは、すごく気持ち良かったね。」

といいます。今年も9月に入り、そろそろ自転車旅行の季節となりました。たぶん、去年に引き続き二人だけになると思いますが。何となく楽しみで、心が、ゆったりした気持ちになれるような気がします。車であつという間に過ぎ去る景色に、驚きの声を何どか……。

いつも時間に追いかけられているような気がしてならない時、ゆっくりと自転車に乗ってみたいですね。

5. 通勤・通学

——ブルーマンデーを楽しく——

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

秋山 隆一 (つくば市松代)

はじめにお断りしておきますが、まとまりのある文章を書くのが苦手なので、わかりやすくするために章立てにしました。

1. 序章

朝、部屋の窓のカーテンのすき間から外をうかがう。天気は晴れ。今日も自転車で行こう。

2. あいさつ

外国人研究者の宿泊施設の前の道。散歩している親子がいる。おはよう。外国人の人は見知らぬ人でもそれ違う時、あいさつをしてくる。また、言葉ではなくても会釈をしたりとフレンドリーである。このあいさつというごく簡単に思える行為でも、いざ実行するとなると結構難しいものだ。例えば、山登りなどですれ違う人どうしあいさつを交わすことはあるが、毎日の生活の中で見知らぬ人にあいさつすることはあまりない。しかし、こういった機会を多くすればお互いにもっと心がなごやかに楽しくなるのではないだろうか。

3. 車社会

土浦学園線を横断する。車が多い。つくばの町は典型的な車社会の町である。車と人、車と自転車、また車と車の事故も悲しいことに多く、毎日どこかで事故が発生している。これは、一人一人のほんの少しの相手をいたわる心があれば相当減ることであろう。まずはできることから始めよう。

4. 寺

わき道に入る。一番静かで落ち着いている道だ。自然とペダルをこぐ力が弱まり、ゆったりと気分よく走る。右手に寺がある。安福寺というそうだ。この寺、ぼくだけが感じるのかもしれないが、実に渋い味のある古寺といった趣きがある。以前に黒沢明監督の羅生門という映画を見たことがあったが、その中の山門のシーンを思い起こす。朝よりも夕方の帰り道に見ると、夕日が当たってどこか古い歴史のある町にいるような感じさえ受ける。つくばは新しい所が多いので余計に際だって見えるのかもしれない。そんなことを思いつつ自転車を走らせる。寺のとなりにかつらぎ保育園がある。お母さんまたはお父さんが車で連れてきている。子どもたちは、元気に園内を走り回っている。

5. 終章

もうすぐ会社だ。その最後の最後に心臓破りの坂がある（大げさな）。これを登って到着。寮から会社までのほんの7~8分の距離であるが、毎日毎日見る景色は同じではなく、四季折々の風景の違いは当然のことであるが、その日の自分の体調、気分によっても、実に様々な変化を見せてくれる道中である。

こんな毎朝の通勤風景である。

6. 付録（昼休み）

今年の夏は雨続きでパッとしない日が多かったが、めずらしく天気が良いときには、自転車で5分くらいの所にある万博記念公園に行って昼めしを食べる。残念ながらぼくはまだ独身なので、手料理のお弁当など恵まれたものには縁遠く、朝会社に行く途中にあるコンビニで買い込んだおにぎりの昼めしを食べて満足して芝生にゴロンと横になる。ちなみに、午後1時にはちゃんと会社に戻っていることを付け加えておく。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

草野 文雄（つくば市花畠）

私は、つくば市に在住している学生です。通学する時には自転車が必需品となっており、自転車がない生活など考えられないくらいです。私は高校生の時、3年間ずっと自転車で家がある花畠から並木に通学していましたし、今はつくばセンターや筑波大中央まで自転車を利用して、私立の大学に通っています。私がなぜ自転車に執着するのかと言いますと、一言で言えば、季節の移り変りを心と肌で感ずることができるからだと思います。やはり、毎朝、同じ時間、同じ場所を自転車で走っていると季節に応じて色々なものが変化していくことが手に取るようにわかるのです。たとえば、広葉樹の葉のつき方や色、いろんな虫の音、鳥のさえずり、太陽の高さ、などがあります。しかし、もうひとつ乗用車に乗っているとまず気が付かないことがあります。それは空気の質の移り変りの様子です。私としては、冬から春への時期と、夏から秋への時期がとても好きです。特に、夏から秋へ変わるときの空気は、日差しは夏のままでありながら、夏のじめじめしたうざったい状態から一気にその湿気を奪い去ってくれた爽快感を与えてくれます。このように、私にとっての自転車の楽しみ方は、自然の中にある自分を意識し、自然の変化から色々なものを発見して勝手に喜んでいるという具合なのです。

私はまた、自転車レースにも興味がありまして、特に【ツール・ド・フランス】というフランス一周をするロードレースでは、アメリカ人のグレッグ＝レモンを応援していました。その影響でよくロードレーサーで学園を駆け回っていました。東・西大通り沿いは、自転車専用道路の車幅が近隣の都市部に比べて非常に広く、しかもよく整備してあり安心して通ることができます。ただ少し気になることといえば、自転車道・歩道が信号などでいったん切れる所での段差です。たしかに、普通の自転車ならばなんともない段差なのですが、タイヤの細いロードレーサーには、段差を乗り

切れるだろうかと、タイヤを痛めないかなどの危惧が生じます。あとは、私以外の方でも一瞬ドキッとした御経験があると思いますが、東・西大通りの『左折可』の所です。自分もドライバーの一人なので気を付けていますが、ここには歩道があるのを知りつつタイヤを鳴らして左折していくドライバーをよく見かけます。ですから、自転車でここを通るときは細心の注意が必要です。あるいは、「自転車優先じゃない？！」と意地をはらずに自分から一時停止してしまう方が、より安全に楽しく通行でき、結果として早く目的地に着けるというものでしょう。まあ、以上のようなことを考えたりしながら、私はロードレーサーに乗っているわけです。

つくば市内は公園が多く、たいへんきれいに整備されていて、しかもそれが、整備された歩道でつながっているので、自転車を使って子供を連れて歩く親の方は安心できることだと思います。よく家族そろってマウンテンバイクに乗っているのを見かけますが、ハイキングにでも行くのでしょうか、見ているほうも心が和みます。特につくば中央図書館の側の公園の所で、そのような自転車家族を見かけます。『心地よく風を切って自転車に乗る』ただそれだけですが、家族揃って同じことを体験するということに意義があるのだと思います。そして、つくば市の公園通りは、そういう雰囲気にぴったりだと感じなのです。

私は、自転車に乗ると、普段の生活の事を忘れて色々なことを考え、思いに耽る癖があります。それは、まったくストレスにはならず、むしろ生きることの原動力になっていると思います。筑波大の中のきれいな並木沿い、つくば公園通りを走るときは特にそうです。たぶん、自転車に乗っていると、自然のなかに自分がたしかに存在しているという喜びが生まれてくるからだと思うのです。

また、自転車に乗っていると、人に道を開かれたりします。以前「西武デパートはどこですか」と聞かれ少し戸惑いました。なぜなら、目の前に西武デパートがあったからです。自転車に乗っていると結構そういうコミュニケーションがあっておもしろいのです。

自転車に乗っていちばんすばらしいことは何よりも自分の世界観がより大きくなることです。世界観が変わると、価値観も変わっていき、新しい自分を発見したり、また作り出したりできるようになります。それは、自動車に頼らず自分の足で自然の中に繰り出すことに始まるのではと思いま

す。ぜひ、つくば市の多くの方々につくばの公園通りなどを利用してもらいたい、生活をゆとりある豊かなものにしてもらいたいです。そして自分も今までと同じように、つくばでの自転車生活を楽しんでいこうと思っています。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

佐伯 佑子（阿見町荒川本郷）

私の家族は転勤族で日本の様々な所をまわってきたが、つくばほど、自転車を利用する人にとって便利で、快適で、楽しい所はないと思った。それらについて、通学に利用させてもらっている私は、いくつかまとめようと思う。

1. 四季の変化

春風に乗って散りゆく桜の花びら、汗のしたたる夏に、色鮮やかな緑で木陰をつくり、秋には、パレットのように、様々な色をつけた落ち葉が大きなじゅうたんをつくりあげる。そして、寂しそうな裸の木からつり下がっているみの虫。つくばには、道路沿いに、たくさんの木がある。そのおかげで私は、四季を目や耳、そして風で感じることができる。特にありがたいのは、夏。鮮やかな緑で、私たちを、すずしい気分にしてくれる。そのおかげとでも言ったらよいのだろうか、私の長い通学時間は苦ではなく、楽しく、心のやすらぐ時間となっている。

2. 小さなベンチ

つくばには、いたる所に、立派な公園がある。だが、私にとってうれしいのは、所々にある古ぼけた木のベンチである。天気のよい日のお昼休みに外に出てお弁当を広げる時、土曜の午後、焼きたてのおいしいパン屋のパンを食べて友達としゃべる時、帰宅途中、どうしようもなくお腹がすいて、のどがかわいた時に寄るスーパー。こうあげてみると全部食べることだが、この上にあげた事柄を行う時、利用させてもらっているのが、小さなベンチなのである。敷物を持ち歩くことはめんどうだし、立って食べたり、自転車にまたがって食べることは何となくいやである。だから、本当に、ちょっとした所に隠れている、小さなベンチは、うれしい。そして自然に囲まれた所で食べることは、本当に、楽しく、おいしいと思う。これは、自転車の人の特権だと思う。車では入ることのできない小道でも自転

車だったら入ることができる。そういった、自分だけの小さな空間を見つけることによって、幼い頃の“秘密基地”を再び作ることができる。これは、いつになんてやめられないと思う。

3. 不満

これは、自分の責任なのかもしれないが、段差が多く、その度ごとに体が痛い。そしてお昼になって、お弁当のふたを開けると、見事に散乱している。これを、どうにかしてもらいたいのである。

4. 駐輪場

つくばには、多くのマンション、アパートがあるが、どこを見ても、きちんととした自転車置き場があり、そして、街の中心部へ行くと、きれいにきちんと自転車が並べられるようになっている。比較することは、あまりよくないことかもしれないが、私の近くでは見られないものだ。これは、自転車の利用者が多いために生じた状況ではないかと思う。

では、なぜ、自転車を利用する人が多いのだろう。それぞれ、都合や、理由などがあるからなのだとと思うが、それだけではないと思う。きっと、私も含めて、それらの人々、一人一人にとって快適だからなのだと思う。そして、自転車には、車とは違うスピード、つまり、自然とふれ合ったりすることができるスピードが与えられている。これは、自転車の特権だと思う。私は、高校生活の残りの1年半、風に乗って、友達と今までどおり、通学を楽しもうと思う。

最後に、つくばの環境を整えるために、草を刈ったり、虫を駆除して下さっている人たちにありがとうとお礼を言いたいと思う。

『つくばビギナーの自転車生活』

肥後 伸子（つくば市松代）

今年の4月、結婚と同時につくば市に転入してから、早くも5ヶ月が過ぎました。

「あれば買い物にも便利だしね。」

と、軽い気持ちで一緒に持ってきた、中古の赤い自転車は、今では私の生活の足となり、思う存分の活躍をしています。

結婚前、東京（文京区湯島）に住んでいた頃は、自転車での生活など、全く考えていませんでした。10分も歩けば、JRや地下鉄など、周囲5ヶ所の駅にも行くことが出来、電車の利用がたいへん便利だったこと、そして何より、人も車も多すぎて、車道も歩道も、自転車のための道ではなかったということが、その大きな理由でした。実際私も、都内の歩道で自分の身体すれすれに、自転車がすごいスピードですりぬけてゆき、ひやひやしたことがあります。

それとは対照的に、つくば市内には、遊歩道なども多くあり、自転車にもとても優しい街、という印象を受けました。最近、週に2回、筑波大学で事務の仕事をさせて頂いているのですが、その通勤にも自転車は、なくてはならないパートナーです。

私の住むつくば市松代から、大学までは約7キロメートル、往復でおよそ14キロメートルの道のりです。この長さは、これといったスポーツをしていない私にとって、最初はとても辛いものでした。しかし、バスの便も悪く、たった1台の車も主人が通勤に使っているという現実もあり、頑張ってみようかという気持ちにもなってきたのです。

さすがに、最初のうちは、日頃の運動不足が災いして、ひざはガクガク、汗もだらだら、大学に着いても、すぐには仕事を始めることが出来ない位の有り様でした。同じフロアで働く友人からも

「えっ、松代から自転車で來てるの」

と、目を丸くされたものです。

けれども、少し馴れてくると、その苦しいと感じていた通勤途中に、素晴らしい風景が沢山あることにも気付きました。そうなると一転して7キロメートルが楽しいものに、なってきたのです。

先づは、うちからすぐ近くの松代公園。この公園の朝の景色は本当に美しくて、私もしばしば自転車を降りて、そのながめを楽しめます。そうするうちに、池に住む水鳥たちが人を恐れる風もなく、グワッグワッと鳴きながら近付いてきて、私の方にも朝のあいさつをしてくれるのです。その姿は本当に可愛らしくて、つい私もニコニコしてしまいます。

そして408号沿いを通り、遊歩道を目指すわけですが、残念ながらこの国道は、車の量も多く、余り快適とはいえません。朝から追突事故を目撃したこともありますし、夕方はガソリンスタンドから出てくる車などもあり、油断のならない道路です。でも、道沿いの小さな畑に、茄子が実っていたり、民家の庭先に美しく手入れされた赤い花が咲いていたり……と、ゆっくり走った分だけ、多くの楽しみも知ることが出来るような気もします。

遊歩道は、少々坂が多く、段差のあることを除けば、本当に素敵な道路です。私の好きな場所では、クレオ横から見る筑波山が、やはり一番でしょうか。この附近には、近未来的な美しい風景も沢山ありますが、東京に住んでいた私にとって、山の見える風景は、やはり新鮮で、あたたかいものを感じます。天気の良い朝、濃い緑をいだく筑波山を見ると、私もにわかに元気になって、

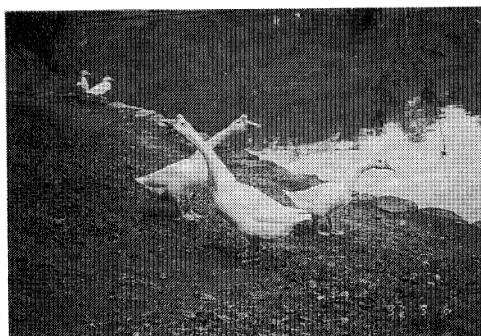
「ようし、今日もがんばろう」

と、ペダルをこぐ足にも、力が入ります。

その先の松見公園も、私の好きな場所のひとつです。シンボルタワーに朝日が当たり、まぶしさに、目を押さえながら下を向くと、そこには、色とりどりの花々の咲く花壇があります。公園内をゆっくりゆっくり自転車で走るのは、今までラッシュのぎゅうぎゅう電車に乗って通勤していた私にとって、最高の贅沢のような気がします。

贅沢といえば、往路、復路共、毎回少しづつコースを変えて、いろいろな道を走っているのも、そのひとつかもしれません。見知らぬ農道が、不意にいつも通る国道につながったり、角を曲ったとたん、急に視界が開け

てあかね色の夕焼けが瞳にとびこんできたり……。ちょっとした出来事でも、びっくりしたり、感動したり。今、私が心から素直に、「つくばに引っ越してきて本当に良かった」と思えるのは、そんな自転車の生活があるおかげだと信じています。



これからも、自分だけの、ちょっとしたお気にいりの風景を、自転車に乗って、見つけてゆきたいと思います。そして今は、始まったばかりの、つくば市での生活を、もっともっと、楽しいものにしてゆこうと、わくわくしているところです。



『自転車のあるつくばの楽しい生活』

匿名希望

一昨年の春のことである。筑波大学に入学することになったので、私は家にある一番大きな鞄に衣類やらなにやら入るだけ詰め込んで、この「つくば研究学園都市」にやって来た。道も広々としているし、公園などもたくさんあって、私はこの街がなかなか気に入ったのであるが、2~3日暮らしてみると、この街が案外不便に出来上がっていることに気がついた。交通機関が、近未来小説に出てくるようなこの街にしては、意外なほどお粗末なのである。公共の交通機関はバスとタクシーぐらいしかない。貧乏学生の私がタクシーなど利用できるはずではなく、またバスも便数が少なく、その上、運賃も馬鹿みたいに高いのであった。このような現実を知った私は早速、自転車を買い求めるにした。

その頃、私は親戚の人から小金を貰って金持ちだったので、店にあった二番目に安い自転車を買うにした。黒いなかなかスマートな自転車であった。大変気に入ったので、私は自転車に名前を付けてやろうかと思ったが、いい名前が思いつかなかったので、取りあえず自分の名前を自転車に書くにした。日頃から見慣れている私の下手な筆跡で名前を書かれたその自転車は、何だか以前より泥臭くなつたように思われた。

自転車に乗るのは久しぶりのことであった。私の郷里は坂の多いところで、自転車に乗るのにはあまり適した場所とはいえないかった。また、自転車で通学するということもなかったので日常的に自転車に乗ることもなかった。家には古い自転車が1台あったが、それは重く作られていて、所々錆びついており、恰好が悪く、その割には花柄の模様などが付いているので、乗りたいという意欲をかき立てるものではなかった。いきおい、何か用事がないかぎり、まず自転車に乗ることはなかった。

新しい自転車は恰好が良かった。ペダルを漕ぐとすいすいと進み、ペダルを漕ぐのを止めるとからからと小気味よい音をたてた。ブレーキを軽く

握ると、きゅっと止まった。自由自在であった。私は嬉しくなり、見知らぬ通りを意味もなく走り回った。

そうこうしている内に、学校が始まった。私の住んでいた大学の宿舎から大学までは、1キロ半程の距離があった。私は当然のごとく自転車で通いはじめた。宿舎をでると、小さな森に入る。その森を抜けると、次には天久保池という、小さな池がある。この池には近所の子供がよく釣りに来ている。この池の上には橋が作られていて、その上を通る。この池を過ぎてしばらく行くと、体育や芸術を専門にしている学生の勉強する建物がある。この建物は一般に「体芸棟」と呼ばれている。この体芸棟までの道の両脇には様々な種類の植物が植えられていて、季節が来るとそれぞれの花を咲かす。体芸棟を過ぎてしばらく行くと「大学会館」がある。ここを過ぎ、陸橋を渡ると、今度は松美池という池が右手に見える。この池にはアヒルやハクチョウたちが住んでいる。この池の向こうに、私の所属する「第一学群棟」というのがある。この自転車専用道路は「ペデストリアン」という名称を持っているが、学生たちの間では「ペデ、ペデ」と呼ばれている。

この「ペデ」は、宿舎から大学の方向とは逆に行くと、松見公園からつくばセンターを経て洞峰公園に至る「つくば公園通り」に通ずる。もっとも、洞峰公園まで足を伸ばすことはめったになかったが、つくばセンターから宿舎までの道は週に幾度かは通った。この間、北大通りの陸橋を越え、松見公園を通って古本屋街に至る道の両脇には桜の木が多く植えられている。ここの桜は4月中旬頃になると満開となる。この道は坂になっているので、下りの時はペダルを漕がなくても勝手に自転車は進んでいく。春の風が吹くと、花びらがはらはらと散る。視界全体が薄桃色となる。ブレーキを時折かけつつ、ゆっくり進んでいくと、とても贅沢な気分になる。

私はこの桜並木がとても気に入ったので、桜の花の咲く頃には必ず何度かここを通るようにしている。今年の春も楽しみにしていたのだが、都合でつくばに戻ってくるのが少し遅くなってしまい、帰ってきた時にはもう大方の花が散ってしまった後であった。

6. 冒険旅行・こんな出来事

——自転車だからこそ——

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

石田 豊 (つくば市松代)

女人の人の自転車姿というのはいいものだ。長く健康的な脚がスカートをひるがえすのはもちろん、小さなサドルに大きなお尻をドーンとのせてる後姿もなかなかいいものである。サドルがちょっと気の毒と思えるくらいがいいと私は思っているのである。

子供と今日の食べ物といった大事なものを荷にペダルをこぐ、生きるひたむきさといったものを全身にあふれさせている。

つくばにはクルマの入らない通りが何本かあって、その並木は四季折々花をつけ目や鼻を楽しませてくれる。日本中、たいていの街の自転車ライダーは排気ガスを浴び駐車中のクルマと電柱の隙間を縫わねばならぬという事態だからなんと恵まれていることか。

風のやわらかな日、ピューンと飛ばす快感は自動車乗りには味わえぬものだ。

つくばに住みはじめて2年と少し経つ。引越してきた当初、変った乗り方をする女人に気付いて目を丸くした。膝を開き脚を広げるようにペダルを踏んでいる。いわゆるガニ股というヤツなのである。気をつけてみると一人、二人でない、たくさんいる。しかもガニ股乗りの女人が下品そうなのかというとそうは見えない。教育もありそうだし、上品そうな顔をしているのである。澄まし顔をしてガニ股乗りをしているのである。

どういうことなのだろう、と悩んでしまった。足先を横に出し、かかとでペダルを踏むほうが運動工学からいって楽なのか。試してみた。そうとも言えない。では、ファッションとして取り入れた乗り方なのか。

ハハーン、なるほどと思ったのはしばらくたってからだった。子供をハ

ンドルに固定した椅子に座らせペダルを踏む女の人がいる。椅子が邪魔になるから、どうしてもガニ股になっている。これはこれ、目立つことはない。だが私が気になったのは子供が成長しハンドルの椅子には座らなくなつてもガニ股であるせいだ。長年の習慣、ペダルを踏む時はついガニ股にというの子育ての勲章というのかどうか。

実は私も自転車愛好家である。もう十数年も以前、これほど流行する以前に身体に合ったマウンテン・バイクを特注したくらいである。このマウンテン・バイクでバスと競走したことがある。

「今、発車したヨ」

東京の友人を東京駅発筑波山行きの特急バスに乗せ、バスが発車したところで車内電話を使って電話させた。直接、私はマウンテン・バイクにまたがりいざ出発、筑波山まで走ろうというわけだった。

つくばから筑波山まで二十数キロ、片や東京駅から筑波山まで八十数キロ、だが敵は常磐道を時速100キロを越えて走る。相手にとって不足はないのである。

西大通りを北に土木研究所や教育会館をひとつとび大穂まで一気に走った。国道408をさらに北上、途中上沢のあたりの坂には難渋したがとにかく125号の三叉路に出て桜川巡見橋を越えたのである。

筑波山はすぐそこにあった。小沢から沼田の登り口まで2キロと少し、バスは近付いているはずだがまだ見えない。暑い日で喉が乾いていた私は自動販売機で缶コーヒーを買って飲んでいた。そのとき、そのバスが目前を通り過ぎた。

結局、わたしのマウンテン・バイクは筑波山駅に十数分遅れて到着したのである。善戦だろう、こっちは年齢とも戦っていたのだ。

先日、秋晴れの日には鷹を見に出かけた。

筑波山の南、峯づきの稜線に風返峠、不動峠、朝日峠がある。このあたりの空に鷹が飛ぶのである。しかも渡りの鷹だという。教えてくれたのはバードウォッチャーの知人だが耳にしてからどうにも気になってしまったのだ。

つくばからとにかく東北にでる。整理された街区をはずれるとすぐ農道だがこれはきっちり舗装されしかも直線で東西、南北に通じている。自動車の通行もほとんどないから、あつらえたようなサイクリングロードだ。

だが、桜川には困った。農道は途切れ橋が見当らない。ぬかるみの土手道を北に走るようやく桜橋にたどりついた。

東城寺。8世紀末に建立されたこの寺は山門、そして見事な参道をもっている。鬱蒼と茂った樹木、両側の崖は木々の根にえぐられむきだしになっている。常陸ではなく出羽の深山を歩いているような気がする。

不動峠に登ると霞ヶ浦まで望める。ミンミンゼミ、赤とんぼ、ふわふわと飛びジェイと鳴くかけす。

筑波山の山腹のケーブルカーを双眼鏡で眺めていると黒い何物かが横切った。やがて私の上空にくるとそいつはくるくると回るように飛ぶ。つられるのかそいつに加わる仲間。2羽、3羽と群れ飛ぶ。

そいつが双眼鏡いっぱいに羽根を広げる。ミサゴかノスリか、とにかく鷹だった。古い時代から筑波山に渡りくる鷹に間違いないのだった。

『わが家の自転車』

小方 順子 (つくば市天久保)

私は自転車が大好き人間です。15年前は交通に便利な所に住んでおりました。歩く事、そして自転車、それはそれは健康的な生活をしておりました。私の自転車は、主婦自転車ではありません（スポーツ車）。格好人間のため、また目立ちたがりやのためか、デザインが違うのです。その自転車も、つくばに引っ越しをしてきました。つくばは、車社会でもあります。私の自転車は主に週末に活躍します。夫は車に乗りません。自転車通勤を11年間、晴れた日のみ走り続けております。往復14kmの道のりをアップダウンが少々もの足りないとほやいておりまして、でも事故で車が渋滞しているときなどうれしそうな顔でスイスイと走ってまいります。

ある日どうしても外出しなくてはならない事になりつくばセンターまで自転車で行きました。2、3日その自転車がセンターでお泊りをするはめになりましたが、急いでいたので鍵を持って行くのを忘れていました。荷造り紐でぐるぐる巻いておいていきました。2、3日後帰って見ますと、むなしくも、うそみたいに、私の自転車はなくなっているのです。エ！翌日また行って探しましたが見当たりません。私の大事な自転車返して下さい！！とはり紙をしてきました。15年間可愛がった時もありました。毎夜眠れません。自転車の型が頭の中をぐるぐるかけめぐります。仕事が終わってもセンターまででかけ、今日もない。警察にも行きました。盗難届けを出そうとしたんですが、そんな大事な自転車をどうして鍵をかけておかなかったのとおしかりを受け、自転車登録がしてありますからと言つても、15年前ではねー。私の心は毎日自転車のことばかり。皆が乗っている自転車を恨めしげにながめ、また自転車を探している人を見つけると、私と同じようにとられたのかと思い、ま新しい自転車があちこちに放置されているのをみると、私の自転車もと思うと悲しくなります。

しかたがない、中古の自転車でも買おうかなと思っていたある日曜日。

うそみたいなお話をながら、車で走っていると、わが家の近くのスーパーマーケットの前に錆びている自転車を見つけました。あれ——私の自転車、私の自転車、夫もうんーそうだなーとそれをのぞきにいきました。4ヵ月ぶりです。チェーンははずれて、雨の中さびしげに私を待っていてくれたのです。エキサイトして自転車を車に運びました。こうして自転車はわが家にたどりつきました。そうして友人らにグッドニュースを報告しました。この執念！！自転車を見つけることができてうれしくて、夕食はうるさい位うれしいうれしいの連発でした。ふと亡くなった父のことを思い出しました。私の父は毎日自転車通勤をしておりました。パンクしたと言つては自転車をひっくり返して修理をし、どこへ行くのも自転車様々の父。そうだ心があれば、大切にすればきっととおもいつつ、スポーツの秋は真っ盛り。また自転車は通勤にそして週末にはサイクリングに走りだしました。平坦な道のりですが何か違うものが。車の目線と自転車の目線が違います。何かが見つかりそうです。そうして自転車のルールが全然守られていないことにも気がつきました。無灯火、右側通行、横列、注意したいものです。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

ハーメド・アーマディヤール（つくば市並木）

僕が、このつくば市の縁を踏んだのは、確か、10年前のことである。僕が、この日本の中の茨城県の中のつくばに来たときは、日本語も喋る事すら出来なく、自転車も乗る事すら出来なかった。そんな、僕に、ある日、突然、幸福が、やって来た。

それは、お父さんが、僕に自転車を買ってくれたこと。僕は、初めて自分自身の自転車を持ったことで、嬉しかった。

僕は、その自転車を見つめながら、思った。これさえ乗れるようになれば、どんな遠くっても、近くっても、冒険が出来るなあと僕は、思いを込みながら、さっそく、その自転車で、練習を始めた。全然乗れなかつた、そんな、僕も、自転車を乗れるようになったのは、あれから、確か、3週間後であった。

僕は、自転車に乗れたことに、嬉しくって、嬉しくって、堪らなかつた。

僕は、さっそく乗れるようになった自転車で、この、つくば市の中の一人での冒険を始めた。確かそれは、5キロ先の小学校であった。小学校に着くと、まもなく、僕は、余りにも嬉しかつたせいか、わざわざ友達の家まで訪ねて自慢をしたり、その帰り道に、高い坂を降りたり、それからとなく僕は、10キロ以上も先にあるとは知らずに、僕は、筑波山までのもう一つの冒険を始めていた。

確か、その季節は真夏であり、その道は、とんでもなく恐ろしい道であったことは、今でも、僕の心に刻んである。なぜ、僕が、そんな道を通つて、わざわざ10キロ以上もある筑波山まで行ったかと言うと、それは、僕自身が、余りにも自転車での冒険が楽しかつたせいか、それとも、そこに余り長く住んでいなく、日本語も余り喋れなかつたせいなのか、どんなふうに行けば、その筑波山までたどり着くのかさえ知らなかつた。

だけれども、余りにも、自転車で軽々にあちこちに行けるからといって、

僕はどんな道であろうと、どんな所であろうと、気にもせずに冒険をしていた。やっと、筑波山にたどり着いた僕は、戸惑うこともなく、腹がへつていたために、泥まみれのまんまで、お店に入ると、そのとき、みんなの視線が僕の方へと集まって来たために、なにか悪いことをしたかときにはながらも中へ中へ入って行き、僕が一番食べたかったビックリマンシール入りの菓子を買い、お店の内で開けて食べている最中、僕が、通って来たお店の道を振返って見たときには、汚れていたことに僕は、初めて悪いことをしていたんだときづいた。

僕は、そんな、お店の人の視線を気にしながらお店を出て、また、泥まみれであるままに、自転車での冒険を始めた。その道は、普通の人から思われれば、ただの帰り道であろうと考えられてしまうが、僕に取っ付きの大きな冒険への道でしか思わなかった。その大きな冒険への道も、ただの道ではなかった、僕は、まっすぐに家に帰れば、45分もあれば着く道であったが、僕は、3時間以上もかけて自分の家に帰って行った。その、通つて行った道は、大変であったが、僕は、初めて本物の自然を見れたために、このつくば市の中の冒険をみんなに自慢できると思う。緑が多いこのつくばを好きだ。だが、今の僕よりも、10歳若かった頃の僕は、もっと、もっと、このつくばを愛していただろう。今のつくばといったら、なぜか、このすばらしい緑を破壊し続けているじゃないか。長い間、守り続けられて来た、このつくばの緑をもう一度、みんなの力で守りたいと僕は、思う。僕は、今もなおこのつくばでの自転車の冒険をしています。ほんとうに、自然は温かく豊かな物だと心から思う。だから、これ以上このつくばの緑を破壊してほしくないんだ。しかし、こんな僕の気持ちもこのつくばのみんなに伝える事が、出来ないのだから。僕は、つくばに自然があるからこそ、楽しい自転車の冒険が出来ると心から誓うとともに、僕は、これから先も、ずっと、ずっと、つくばで、生き続け、自然の中での冒険を楽しむだろう。

僕は、つくばを心から愛しているのだから。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

宮本 友和 (つくば市大角豆)

休みの日になると、だいたいきまって自転車に乗って遊びに行く。遊びに行く場所というのは、自転車をこぎながらきめるといった状況が、長い間つづいていたために、今ではこの俺の癖になってしまったような気がする。そして、その道を、彼女と二人だけで通ったあの日を思い出すように、今日も、その道を通っている。通りつづけている。そこの道は、俺にとっても、彼女にとっても、今でも、そしてこれからも、思い出の道である。思い出の道にしていくつもりである。

つくばと聞いて、普通の人なら、学園都市と思いうかべるかもしれない。もちろんそうである。そうである反面、田舎の部分もやたら多い。もっとはっきり言うならば、都会の周りに田舎があるといった状況である。でも俺は、そういったはっきりしないつくばが好きである。これから、つくばのはっきりしない場所を、はっきりしないこの俺が、はっきりしない文章で、つづっていこうと思っている。それでは、俺の思っている事すべてを書くと、まず、彼女と二人だけで通ったあの道を、ちょっと思い起こしてしまったので、まずそこから書くと、その道はけっこう長い通りで、東大通りでもなく、西大通りでもなく、その間にある公園通りである。真っすぐ行くと、洞峰公園に行くという一本道である。その道を通っていると、考えこんでしまう時がある。考えこんでしまう場所がある。木が周りにあるせいだと、近ごろよく思うようになった。心が落ちつく道がある。みんなが愛する道がある。そこの道を通るたびに、すてきな事が、起こる氣がする。世界で一つしかない道。世界中で搜せば、似たような道はあるだろう。あったとしても、それは、にせものである。日本にある。つくばの中にある。縁に囲まれたこの道が、世界中で一番みんなが好きだと言える道なんだ。小さな頃からつくばに住んでいて、小さな頃からこの道を通っていて、小さな頃からこの道を愛しているこの俺が、世界中で一番すてきな

道だと断言しよう。本当に心から愛している道だからこそ、自転車で通りたくなる。自転車で道を通っている時、その道の両端にある木々が、この俺の心の中に、話しかけているような、不思議な気分に陥るときがある。そして、俺はいつも、その道を通るのが、嫌いになったわけでもないし、好きになったわけでもないのに、必ずといっていいほど、休みの日になると、その道を通る。その道しかないわけでもないのに、あの日を思い出すと、あの時のあの出来事を思い出してみると、からこそ、思い出の道という事になるから、しらずしらずの間に、その道を通っている。彼女と、初めて二人っきりで通った道が、この道だから。一生忘れる事はできない。忘れたとしても、心には刻んでおきたい。そして、この道に名を残したい。そう思える道が、このつくばにあることを、私は心の底から、誇りに思う。

その誇りに思える道からかなり遠くになって、今度は荒川沖駅の近くにある駄菓子屋まで場面は移動する。初めてその店に入ったのは、数年前の今ごろだったと思う。その頃は俺もまだ小学生だったのだが、俺の記憶にはしっかりと、その駄菓子屋のおいしい味が、思い出すとすぐに俺の口の中にある様な気がして、今でもあの時に食べた懐しの味がよみがえってくる。よみがえってきてすぐにいつもこう思う。また食べたいなど、そう思いながら、あれから一度も行かずに高校生になってしまった。俺は、高校になって初めてその店に足を運んでみた。その時、俺の目に映った物は、小さな小さなその店が、大きな大きなつくばの中で、昔見た同じままの形、あの時の懐しの匂い、思い出のおばあちゃんをこの目で見た時。ひさびさに会って嬉しかったのと、懐かしさで、この俺の目から、冷たい物が流れ落ちていた。涙だった。俺はその時、心の底から熱い物が沸き起こる様な感動を味わった。そこの場所をつくばといった。つくばは広い、その広いつくばの中に一軒、駄菓子屋がある。その駄菓子屋を見ていると、妙に心が落ちつく様な、不思議な気持ちに引かれていく。そんな店がここにはある。とても不思議でおもしろい店だからこそ、知らない人も、知ってる人も、この店に遊びに行ってみよう。とてもおもしろい店だと思うだろう。だって、駄菓子屋だから。そんな風な、思い出の風に乗って思いにひたっている、今日このごろだった。そして、今日という日も終わりを迎えるとしている。過ぎ去ったその時からが、思い出となっていくのである。

『つくばと私の自転車開眼』

山田 陽保（つくば市竹園）

15年前、勤務先の研究所と共につくばに単身赴任して来て、一番先に買ったのは自転車だった。路線バスは本数も少なく、時間の自由もきかないでの、自転車は通勤の必需品だった。買物にも使うだろうと、堅牢かつ良質を目安に選んだ実用車は今もって快適に動いてくれている。

つくばでの通勤コースは、東大通りと西大通りの間を走るサイクリングロードのうち、竹園から洞峰公園わきに至る約3キロメートルである。春は八重桜に覆われ、桜が終わる頃にはつつじ、皐月が一斉に花を開き、夏は涼やかな木陰をつくってくれる。ところどころ開ける視界には近代都市が広がり、四季折々景観に飽きることがない。

路上には登下校する子らの賑やかな声が満ちあふれ、そんな彼らの姿がいつの間にか見えなくなつて、夏休みの訪れを知る。強い吹き降りの翌朝には、散乱する落葉の間で巣から落ちた小鳥が親を求めて鳴いている。行き交う外国人も多く、ふと日本ではないような錯覚に陥る。僅か3キロメートルの中に織り込まれた多彩な詩情は、堅い仕事との往き来をほのぼのとした気持ちにさせてくれる。こんな優雅な通勤を楽しませてもらっているのだろうか。東京での通勤地獄を経験してきた私は、毎日勿体ない思いでペダルをふんでいる。

自転車にも馴れ、脚力にも自信がついた頃、私は自転車で実家の鎌倉まで帰れないだろうかと高望みをするようになった。高齢のこの年齢まで自転車で町の外へも出たことのない私がである。きっかけは東海沖地震の可能性がしばしば言われるようになってからだ。

つくばから鎌倉までは約120キロメートル。東京を中心にして、北に利根川、荒川、南に多摩川など大きな橋梁が多い。大地震がくれば鉄道や自動車道は寸断されるだろうし、特に自動車道は緊急避難のための乗り捨て自動車で埋まってしまうだろう。そんなとき唯一頼れる交通手段は自転車

しかないではないか。人が歩けるところなら大概通れるし、川も浅瀬を選べば何とか担いで渡れるだろう。そう考えた私は何としても一度、リハーサルをやってみたくなった。

昨年のゴールデンウィークのこと、5月3日には電車で実家に帰るつもりで、前日の土曜日は単身宿舎の片付けに当てていた。朝8時頃、片付けを始める前にいつもの通り軽くひと回りしようと自転車に乗って出かけた。外はまさに風薫る5月、新緑に映えてまばゆいばかりの光の洪水であった。ゆったりペダルを踏んでいるうちに、私はこの調子で踏み続ければ簡単に鎌倉まで行けそうな気がしてきた。

別に意気込むでもなく、いつもの調子で国道6号に出てみる。服装もワイシャツに薄手のブルゾンという軽装だ。天気はいいし、時速10キロメートルで走っても12時間か。途中でダウンしたら最寄りのJR駅前に駐輪させてもらって電車で帰り、次の週にそこからまた始めてもいいし、とにかく行けるところまで行ってみるかという気になってきた。

風は緩い向い風で、電車や自動車の窓からでは気の付かない風景を楽ししながらのゆっくり旅へと漕ぎ出した。数時間経て取手に達した頃、さすがに疲れが出て第一次終了点にしようかと思ったが、同時に意地みたいなものが出てきた。そのうち漕ぐのが無感覚というか機械的というか、苦痛を感じなくなり、結局日焼けと埃で真っ黒になった顔で銀座を走り、晩春の陽もようやく傾きかけた保土ヶ谷を過ぎ、戸塚で懐中電灯を買い、家に着いたのは予定通り？12時間後の夜8時だった。湯上がりのビールが格別だったことは言うまでもない。

つくば市内での快適コースに馴れた私にとって、道中最も苦痛だったのは、自転車を担いで越えなければ絶対に通過できない階段だけの歩道橋がいくつもあったことだ。特に駅前など、街なかに多かった。

そして最も危険を感じたのは、停車中の自動車の車道側の脇を通らねばならなかった時だ。いつドアが開くか予測がつかないし、幹線道路でドアにぶつかって転倒すれば死の危険性は非常に高い。車に乗る人は降車の際、後続の自転車に細心の注意を払ってほしいものとつくづく思った。

また、最も助かった携帯品はスパナだった。尻のこする位置をずらすためや、疲労度に応じて頻繁にサドルを調整する必要があったからだ。スパナがなければ完走できなかっただろう。

貴重な体験だった。これでいつでも地震に備えられるという安心感を胸に、黄色く色づき始めたつくばサイクリングロードを今日も快適に走っている。

7. 提案・アイデア

——こんなふうにしたら——

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

池田 絵里（つくば市稻荷前）

赤塚公園のすぐ西側に住んでいるので、毎日のように「つくば公園通り」を利用しています。幼稚園に通う長女を送り出したあと、2歳の次女を自転車の前に座らせて、図書館を目指します。赤塚公園は、雨の次の日は、道がぬかるんで走りにくいのですが、木がたくさんあって森のようでとても好きな公園です。道路を渡って公園通りに入ります。この横断歩道では、自動車学校の車だけが必ず、止まって渡らせてくれます。このあたりに、松見公園などのような、華やかな花壇でもあったら楽しいと思います。2年前、引越してきたばかりの頃、この通りのことは何も知らなかったので、ずいぶん長い間、入るのをためらっていました。どこへ通じるのかもよく分からぬし、淋しそうで、おまけに一番目立ったのが「ちかんに注意」の立て札だったからです。「つくば自転車マップ」のようなものを作って、もっとアピールしてほしいです。今でも人通りが少なくて、淋しくて不安を感じこともあります。つくばは車が多いので、休日など、どこの駐車場もいっぱいになってしまいます。この公園通りを知っていれば、車でうろうろするより、よっぽど、便利なのです。ただ難点は、南大通りなど大きい道路を越える時の坂道です。あれは、自動車の方を地下にもぐらせてほしかったと思います。もちろん、自動車にわざわざされることなく、つくばの中心地区まで行けることは、とても良いことだと思います。さて、洞峰公園、二の宮公園、中央公園と過ぎ、最後の坂道を上れば、ノバホールの広場、図書館へと到着します。ゆっくりと本を選び、シャ・ノワールでサンドイッチとコーヒー、ジュースでお昼にし、重い本を自転車の後ろにつんで、帰途につきます。ダイエーで買い物、今度は自転車の前カゴに

どっさり荷物を積み込みます。しばらく走るうち、子供はこっくりし始めます。用意してきたクッションをハンドルの間にはさみ子供をもたれさせます。そうして走っていると、つくづく自転車って便利だと感心するのです。これだけの荷物を持って（本は10冊以上借りてくる）、寝ている子供を背負ったら、いったいどのくらい歩けるでしょうか。それを何の苦もなく（上り坂以外は）、何の燃料も費やさず、とても速く走れるのですから。自転車を下りて、荷物と子供を抱え、マンションの階段を登っていると、実感できます。子供も自転車で出掛けるのが大好きです。大きな声で歌を歌いながら走ります。自転車で、図書館まで行くというと、あまり普段乗らない人は、びっくりするようですが、慣れてしまえば、15分くらいのことですし、楽しいものです。これからは、もっとぎやかな通りになってほしいし、ちかん注意の立て札がなくなれば良いと思います。各公園の出入りなどに、花壇や水飲み場をつくりたりすれば、良く管理されている印象があるので、親しみ易いのではないでしょうか。駐輪場やトイレなど、施設をつくるだけつくって、あとはだんだん古くなるだけ、という現在の在り方は、間違っています。長く良く管理を続けて、楽しい通りにしてほしいと思います。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

～自転車生活と筑波大生のモラル～

石田 雅樹（つくば市天久保）

日常で自転車に乗る必要性に迫られ、しかもそのための環境が整備されている大学は、日本では筑波大の他にないであろう。筑波大学のキャンパスは南北約4キロ、東北約1キロと広大であるため、講義と講義の間の休憩時間が15分しかないにもかかわらず、次の授業の教室・施設が遠くて移動が大変な場合がある。このような場合、徒歩では間に合わず、そうかと言って自動車では、一般学生が使用できる駐車場が限られているし、なによりいちいち面倒で非経済的である。このため、大学内の移動の際には自転車が欠かせないものとなる。自転車を有効に活用しないことには、日々の大学生活さえも満足に行えないのが筑波大学なのである。日本には大学が数多くあるが、学生のほとんどが自分の自転車を持っていて、大学内で自転車の渋滞が起るほどの大学が他にあるだろうか。

こうした自転車の多大な活用の背景には、歩行者・自転車専用道路、すなわちペデストリアンの充実がある。今更言うまでもないが、ペデストリアンが大学内部に縦横無尽に通っているからこそ、自転車での通学、移動が便利なのだ。これは大学構内に限ったことではなく、つくば市の中心部にまで完備されている。よって、大学から市中心部のつくばセンター、クレオまでスムーズに自転車での移動が可能となっている。このようなことはつくば市で生活している人にとっては当然かもしれないが、宮城県の田舎から出て来た自分は、これには正直言って驚いた。これは恐らく僕だけではないはずで、全国各地からつくばにやって来た学生は皆、車の排気ガスや信号に煩わされることのない通行路があることに感動、と言っては言い過ぎかもしれないが、少なくとも感心しているに違いない。つくば市がなぜ未来都市と呼ばれるのか、その原因の一つがペデストリアンにあると言っても過言ではないだろう。つくば市の都市建設計画の当初から、歩行

者と自転車が快適に通行できるようにという、生活者の立場に立った考えがあったからこそ、ペデができたわけであり、この生活者重視の発想こそが、つくば市を未来志向都市と言わしめる所以である。

しかしながら、自転車での大学生活にも問題点が無いわけではない。第一に、最初に述べたようにあまりにも多くの人が自転車で移動するために大学内ではしばしば渋滞が起こる。事情を知らないものが聞いたら自転車の渋滞など冗談に聞こえそうだが、道幅が狭くなっているところや、駐輪した自転車が邪魔で通行が妨げられたところなどで、自転車の流れが止まることがよくある。講義と講義の間などは特にみな一様に急いでいるのだが、渋滞に出くわすと次の講義に間に合わない。道幅はいかんともし難いが、自転車の駐輪問題は駐輪場を増設することで解決できると考えられるが、それ以上に大切なのは学生一人一人のマナー、心構えである。通行の妨げとなるところに自転車を駐輪しない、近くへの移動の場合は歩くといった事だけで渋滞は大幅に緩和するはずである。

第二に、自転車の盗難の問題がある。僕自身大学に来てから2度盗まれる経験をした。幸い、2回とも自転車を発見できたので良かったが、友人の中には4回も盗難にあって全然出てこなかった人もいる。特に大学の寮では似たような自転車が多いため、日常茶飯事と言っても良いぐらい盗難が頻発しており、鍵をかけていても、鍵をはずして持っていくかになってしまう場合もある。全部が全部そうであるとは言い切れないが、こうなると自転車を盗む犯人が筑波大の学生であるのは疑いなく、未だに人の物を盗ってもよいと思っているわけではないだろうから、確信犯として自転車を盗んでいるのだろう。大変な受験勉強をして大学に合格できても、人間として最低限のモラルも守れないような人がいるのは、嘆かわしいのを通り越して、全くあきれる限りである。

大学への通学、構内の移動のみならず、つくば市で生活するに当たって自転車はなくてはならないものであり、そのための環境がペデストリアンという形で整備されているのは素晴らしい事である。しかしその一方、それを扱う学生の心構え、モラルは今一つのようを感じられる。いくらペデというハードが充実しても、肝心な心というソフトが駄目では、「自転車のあるつくばの楽しい生活」を送ることはできない。自分も未来志向都市、研究学園都市つくばの住人の一人であるという自覚を持ち、他人を思いや

る心を持ってこそ、充実した自転車生活を送ることができるのでないだろうか。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』へよせて

Y. I. (つくば市並木)

つくば市へ横浜から移転して来て早、15年目になります。

それまでは自転車とは全く無縁の生活でしたが当地では自転車は日常生活の必需品です。

毎日の通勤、買物、レジャー等、私の体の一部となっております。健康のためにバス、車を利用せずに自転車と徒歩でと、心がけておりますが、困っていることがございます。

1. 歩道、自転車通路に車が駐車してあり通れません。車椅子の人達も車道を通らねばならず常々危険にさらされております。(写真)
2. 道路の段差があって、危険です。(写真)
3. 樹木、草が道路にたれさがっていて路幅をせまくして危険です。(写真)

楽しいことと云えば通勤道路が四季折々に春は桜、つつじそして、あじさい、と季節が変わり、秋には、いちょう、もみぢ、冬へと落葉カサコソ、路端の雑草の花々、季節の変わることに色とりどりに変わる風景に絵葉書の中を通勤しているような感動があり、つくばでの生活にうるおいを感じます。

移転して来てよかったと幸せを味わっております。

サイクリングコースの洞峰公園から松見公園まで、休日にはギーコギーコとマイペースでゆっくり時間をかけて森林浴としゃれこみ、その途中、西武デパート、ダイエー、カスミストアへとよってショッピングを楽しみ、荷台には沢山積んで家路へとルンルン気分でギーコギーコ。

私は交通事故で8年間苦しみ、にがい体験もあってマイカーは好みません。それ以来自転車を愛用するようになって、健康になりましたし、今で

は自転車大好き人間になりました。

今年度から職場で通勤費2,000円手当がいただけるようになりました。このさい、新車を！！とも考えましたが古くなった今の自転車に愛着を感じ、生活を共にして月日を重ねてきた古自転車、私も同じように人間が古くなって来て、お互いに中古同志でギーコ、ギーコとつくば市の中をツーリング？するのも私らしくていいなあ～とも思ったりもしております。

私のような自転車大好人間のためにもサイクリング用の道路が沢山出来ることを心より望んでおります。



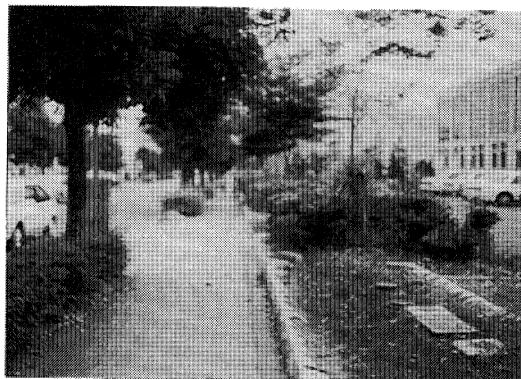
写真で見ると余り気にならないのですが段差が高く、自転車ではいやな道路です。



草、木がおおいからさり、自転車では首を引っこめても通れないほどです。



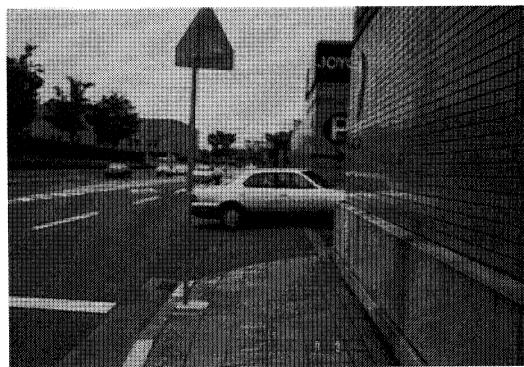
雨降りの日は通れません。体中ぬれてしまいます。



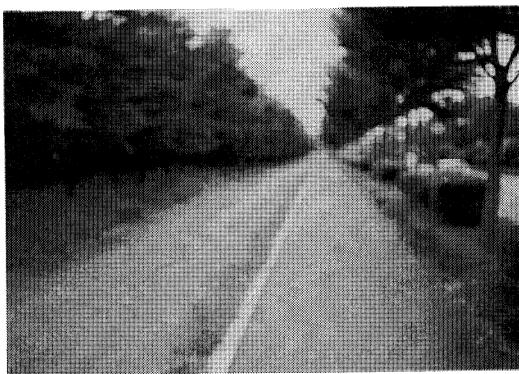
左に同じで歩いてやっとです。私の身長153cmで頭すれすれです。



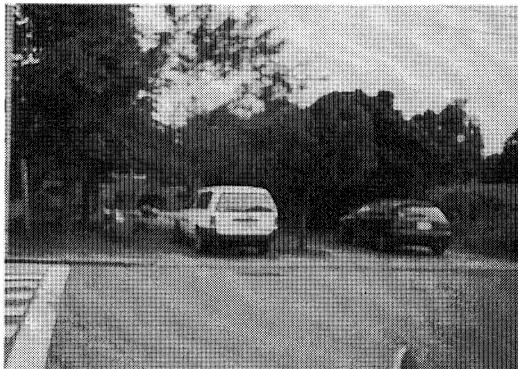
今日は2台駐車していますが休日等は20台ほど並びます。車いすの人達は車道を通っています。



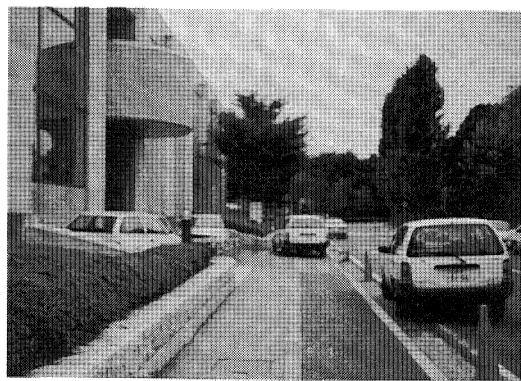
どまん中に駐車していてこれでまあ御用にならないのかしら・・・



ピンボケになってしまいましたが、私の通勤路です。毎日快適にス~イ、スイ、ギ~コ、ギ~コ自転車が古い音です。



ここは通学路になっているのに・・・！！



左に同じ。マナーが悪いですね。特につくばはひどいとのこと。



14年目になりますが通勤路は快適で楽しいです。春は桜、秋
はもみぢ、いちょう・・・本当に幸せ！！

『車社会の発想と自転車』

栗山 正光（阿見町阿見）

いわゆる「公園通り」は松見公園で終わりになっているらしいが、歩行者専用道路は車道をはさんでさらに北へ伸び、筑波大学のキャンパスを縦断する。桜並木や池などもあって、ここをサイクリングするのもなかなか楽しいものである。

その筑波大学の構内、大学会館のあたりに、歩行者・自転車専用道路にセンターラインを引き、ミラーを設置している場所がある。また路面には「徐行」の文字があり、横断歩道（！）の縞模様まで書かれている。ここでは歩行者専用道路がもう完全に一般の車道の感覚であり、自転車はまさに「車」である。

このあたりは人や自転車が集中して混雑するため金をかけて整備したのだろうし、実際、自転車がこうしたサインにちゃんと従えば、流れもスムーズになり、安全性も高まることだろう。しかし車を運転したことのない人に対してどれほど効果があるだろうか。私自身、運転免許を取る時に厳しく教えこまれたからこそ、多少なりともこういうものに気を配ることができるようになったが、その前だったら意にも介さなかっただろう。問題は車社会の発想を自転車にもそのまま適用しようとしていることだ。

東大通りや西大通りの歩道は幅も広く、車道との間にゅったりと木が植えてあって、自転車で走ると「公園通り」に劣らず快適である。だがそれも交差点までである。歩道と車道の段差がかなりあって相当の衝撃を感じる。左折車が猛スピードで突っ込んでくることもある。だが歩道橋を設置して横断歩道をなくしてしまうよりはましかもしれない。学園都市からは離れるのかもしれないが、大角豆の東大通りと土浦野田線の交差点はひどい。歩道橋の階段の中央にスロープを設けてあるのだが、傾斜が急で幅も狭いため、自転車を降りて引いて行かなければならない。これでは誰も利用しない。朝夕高校生が自転車で列をなして堂々と下の車道を横断してい

る。

美術館と図書館が入っているアルスでは自転車置場が建物の一番はじっこにあって入口まで遠い。誰もここには止めず、入口近くの歩行者専用道路に止めている。駐輪禁止の貼り紙はあふれる自転車の陰に隠れて見えない。

私の勤務する図書館情報大学では、建物のかたまっている一角は自転車進入禁止になっている。自転車置場が駐車場の脇に設けてあって、そこから歩かなければならない。場所によってはかなりの距離となる。警備員さんが厳しいせいか、進入禁止区域に入り込む自転車はほとんどない。ただしその境界近くには、自転車置場でない所に自転車がいっぱいである。

自動車の駐車場と自転車置場を同列に考えるのは、車の運転しかしない人間の発想ではないだろうか。車を運転していると、運動不足に陥りがちなので、駐車場からちょっとくらい歩いてもいいと考えるかもしれないが、自転車に乗っていると、それ自体が運動なので、少し離れたところに止めて歩こうなどとは思わないものだ。アルスにしても図書館情報大学にしても、自分自身が自転車で通う人が設計したとしたら、ああいうふうにはならなかっただろう。

自転車も車であることに変わりはないのだから、それに乗る人間の意識もそれなりに高める必要がある、というのは正論かも知れない。しかしこれは建て前であって、自転車乗りの行動を律する力とはなり得ないと思う。車中心の考え方でどれほどモラルを説いても、あるいは施設・設備を充実させても、自転車のある樂しいつくばの生活には寄与しないのではないだろうか。

せっかく素晴らしい歩行者・自転車専用道路があるので、都市計画に携わる人々はぜひ自分で実際に何度も自転車で走ってみていただきたい。そして車社会の発想ではなく、自転車乗りの本音を取り入れた研究学園都市をデザインしていただきたいと思う。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

～ペデストリアンの舗装について～

坂口 次郎（つくば市春日）

はじめに

- 筑波研究学園都市のペデストリアンは、
- ・規模が大きいこと
 - ・学園都市の都市軸を構成していること
 - ・市民の生活道路として定着していること
 - ・植栽が充実していること
- など、非常に特徴的である。

しかし、最近は自転車で通る際に、舗装の乱れが多いことに気付く。先日、学園都市は30周年を迎えたが、ペデストリアンの施工後も20年余りが経つものと思われる。その中で毎年良くなっていくものが植栽であり、一方毎年悪くなるものが舗装である。今回、学園都市におけるペデストリアンの舗装に注目して調査した結果に基づき、今後の維持管理の在り方について述べる。

現況調査

今回の調査は、北は松見公園の西側から学園都市の中心部を通り、南は赤塚公園までの「つくば公園通り」、全長約5キロメートルを対象に行った。方法は、舗装のいたんでいる場所を写真撮影し、地図の上にプロットした。（別紙参照）。撮影は1993年、10月11日に行った。

大きく分けると問題は次の2つに分かれる。

(1) 段差のあるところ

段差のあるところが比較的多く見られたが、その中でもさらに3つに分けた。

・配管等の地下管による段差（写真2、4、5、6）

マンホールや地下管の扉等が盛り上がったかあるいは周りが下がったか判断しかねるが、いずれにせよ相当な段差があり、また性格上道路の中心部に位置するため、暗かったり自転車に乗っている場合にはかなり危険な場所である。

・歩道や橋のエッジ部の段差（写真1、3、10、11、12、13、14）

この部分の段差がもっとも多く見受けられた。特に橋のエッジの段差が多く、高さの差も非常に大きい。この段差は、自転車で通る人には見えにくい場所にある上、道路を横断しているために必ず通らなければならない場所であり、大変危険である。

・タイルのずれによる段差（写真8、9）

前者に比べると大きな段差ではないが、発見しにくいために突然衝撃を感じることになる。

以上段差について述べたが、自転車で走行している場合、わずかな地表面の段差でもかなり敏感に感じるものである。また、体力のない老人や子供達にとっては特に危険な場所であるといえる。

(2) 滑りやすいところ

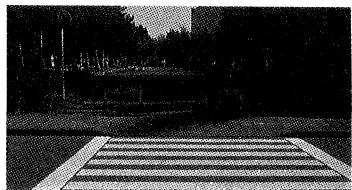
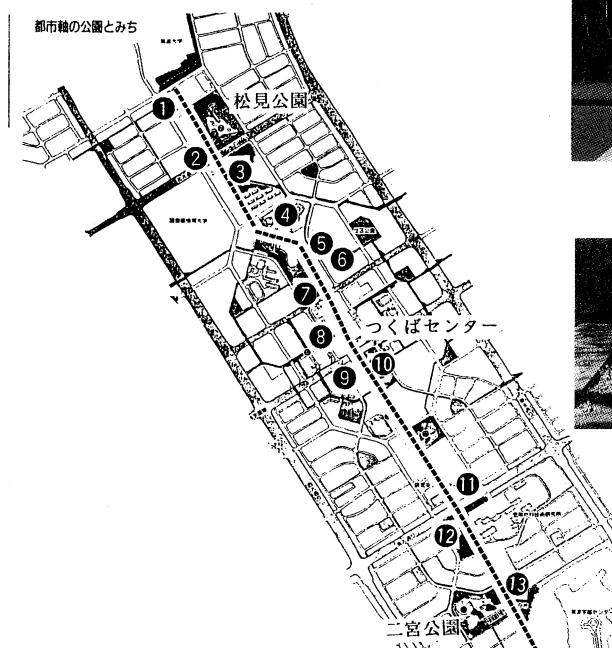
降雨時には全体的に滑りやすくなるが、特に坂道においては顕著である。

（写真8）自転車では傘をさすと片手になるため、ブレーキングやハンドル操作によって転倒する場合が多い。

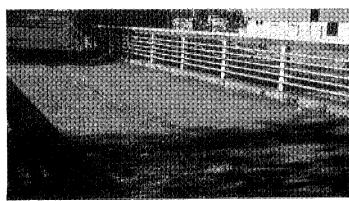
考察

今回の調査で、タイルそのもののいたみより、タイルの段差による交通障害が多いことが明らかになった。これらの段差は今後さらに大きくなり、見受けられる場所も多くなると考えられるため、早急な対応が必要である。また処置の方法であるが、現状では部分的にアスファルトなどで緩和されているところがある（写真4、5、6、9）。しかしこの舗装の処理のような問題は、降雨時の滑りやすさも考慮すると部分的にというより全体的に行わなければならない。さらにこの次の処置のことも考えて、広く、長いスタンスでこの問題に対応していくことが必要である。

一つの方策として、部分的に、表面を陸上競技場に使用するような若干

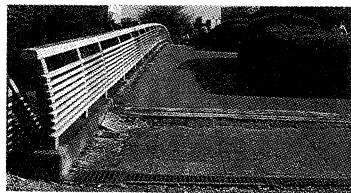


「TUKUBA SCIENCE CITY」
公園と道 住宅都市整備公団
より引用



----- 調査対照ペデ
(つくば公園通り)

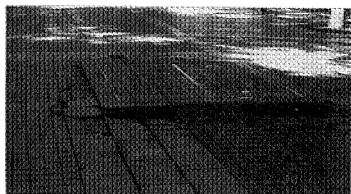




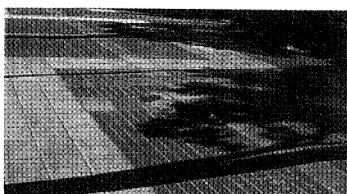
③



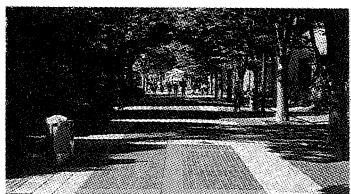
④



⑤



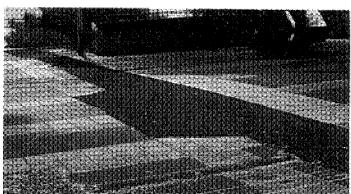
⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



⑪



⑫

弾力性があり、しかも透水性があるウレタン系素材等にしてはどうかと考える。加工しやすいため、将来的に段差が生じた場合でも比較的簡単に対応できる。また降雨時にも透水性があるため滑ることはない。弾力性があるために歩きやすく、仮に子供が転んでも大きな怪我になることは少ないであろう。さらに、着色しやすいため、色彩によって場所を意識させるサインの役割をさせたり、植栽や建築に調和した配色も可能である。

以上は一例であるが、いずれにせよペデストリアンの舗装の問題は現在考えなければならない段階にきていているといってよい。小人数の間で考えるのではなく、この極めて公共性の高い場所を市民全員の参加型によって解決していくことが望ましい。そこからは多くのアイデアが生まれるであろうし、何よりもペデストリアンを楽しい空間にするためには、そこに住民が関心を持ち、愛着を感じることが第一だからである。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

佐野 俊代（つくば市並木）

つくばに転入して、未だ1ヶ月にも満たないが、まず感じた事は、「つくばは広い」ということである。ちょっとした買い物も、図書館や役所に行くのにも、多くの人が車を使う。

つくばに来る前、友人達は、自動車の運転免許を持たない私に、ずい分自転車を持っていくよう勧めた。しかし、つくばにいる期間が半年と決まっていること、自転車の運送料が高いことなどで、徒歩で我慢しようと安いに考えて、自転車を持ってこなかった。その結果、1週間で音をあげて、友人に頼み、私の自転車を送ってもらうはめになったのである。リサイクルショップでもさがしたが、使用頻度が高いため、めったに買えるチャンスはないということだった。

自転車を手に入れはしても、日々の買物には困らなくなつたが、図書館や催し物のために、市の中心部へ行くとなると、一大決心が必要である。バスは30分に1本程度だし、バス停までかなりの距離なので自転車をバス停に置いておかねばならない。今まででは家人の車に便乗していたが、忙しくなってしまえばそれもかなわない。

そこで提案したいのだが「自転車レンタル制度」を設けたらどうだろうか。普通のレンタルではなく、月ぎめ、年ぎめでバスを発行し、必要な所を自由に乗れ、また返すことができるというものである。確実に身分を証明し得なければ発行せず、破損や紛失などに対する保険をかけ得る料金を科すのはもちろんである。今までに所持していた人の自転車は、希望する場合に買い上げれば、それも使えるし、利用者も増えることになる。主なバス停や公園などにステーションを設け、ステーションからステーションへの乗り継ぎ、各々の家に保持している状況などを、オンラインで逐一わかるようにしておけば、このシステムも夢ではない。

自転車が多い街では、盗難・放置自転車も自ずと増えよう。レンタルに

しておけば環境の美化にもつながるのではないだろうか。

もう一ついいことに、自転車は無公害。これをおおいに利用することは大気の浄化にもつながり、またそれを推進することはエコロジー運動の一環として、研究学園都市・つくばのカラーを打ちだすのにはもってこいだと思う。

数年前、南米のいくつかの国々を訪れる機会があった。地方都市では、必ずといっていいほど、中心に大きな公園があり、それを取り囲むようにして教会、役所、主だった店が配されていた。

日本では教会を中心などという考えはないが、「つくば」のシンボルとして、レンタル自転車の中継地点を公園の中のわかりやすい場所に設置したらどうだろう。

バスや自動車との組み合わせも自由だから行動半径も広がり、よりいっそう「つくば」での生活が楽しめるようになることは想像に難くない。

『自転車のあるつくばの楽しい生活』

杉原 洋子（つくば市吾妻）

この夏、娘の亜樹が補助輪なしで自転車に乗れるようになり、我が家も家族でサイクリングを楽しむようになりました。夫は26インチ、私は24インチ、昌樹（小2）は22インチ、亜樹（年長児）は20インチ、由樹子（2歳）は私が夫の自転車のハンドルに付ける幼児用シートに乗り、家族5人、4台の自転車で出かけます。

今までのサイクリングを簡単に紹介します。

1. 我が家（吾妻2丁目）～中央公園～竹園近隣公園～洞峰公園～赤塚公園～乙戸公園～私の実家（荒川沖）～（同じルートで）～我が家

このルートは「つくば公園通り」のメインストリートを通ります。自転車が通る事を前提につくられた道らしく、安全に、楽しく走れます。ただ、歩道橋で立体交差の上り坂では、初心者の娘はいつも泣かされていました。

2. 我が家～中央公園～松見公園～筑波大～東大通り～さくら交通公園～吾妻公園～我が家

このルートで初めて歩行者用と自転車用に分かれている歩道を走りました。幅がある歩道で、しかも道路との間には、並木や植え込みがあり、気持ち良く走れました。

さくら交通公園では、午前中だったので、中のコースを自転車で走ることができ、子供達に交通規則やマナーを楽しみながら体験させることができました。

3. 我が家～中央公園～土浦学園線～サイエンス大通り～万博記念公園～農道～松代公園～土浦学園線～センタービル～中央公園～我が家

このルートでは、自転車通行可でも、歩行者と自転車に分けてない細い歩道を走りました。歩道には車の進入路の度に「車止め」が数本立っていて、娘はその間を通り抜けるのをこわがっていました。大人でも、片側3車線で車がビュンビュン流れて行く傍を走るのは、恐怖感がありました。

帰りはできるだけ大通りを避け、稲刈りの最中の田畠の間を走りました。秋晴れの一日で、風にそよぐスキの向こうに筑波山が青く輝いて見えました。外国人の家族連れの自転車や、稲刈りのおじさんと挨拶をし、言葉を交わしました。

以上、3つのサイクリングで感じたこと

1. 安全のためのルールとマナー

楽しく走るには、それなりのマナーに気をつけたいと思います。私は、歩道をよくベビーカーを押して歩きますが、混雑している休日等には危ない目にあうこともあります。また、子供達と走る時は、反対に歩行者に迷惑をかけたこともあります。自転車同士が追い越したり、すれ違うときも神経を使います。これは体験によって学習されることがあります、できれば、子供達をサイクリングに連れ出す前に、安全に走るためのルールやマナーをさくら交通公園などで教えたいたいものです。

2. 歩道の整備と大型公園

整備されているように思う道でも、実際に通ってみると、色々問題が見えてきます。たとえば、歩道が狭く、歩行者と自転車がすれ違えない所、草が茂り過ぎていて見通しのきかない所、歩道から車道に出るようになっているにもかかわらず、別の所に横断歩道がついている所、ハンディキャップを持つ人達でも歩いたり、車イスで通れるような歩道が整備され、それが維持されたなら、とても住みやすい街になることでしょう。

また、「つくば公園通り」と「つくばりんりんロード」を結び、その間に、ひたち海浜公園や栃木県の井頭公園のような大型公園ができたら楽しいことでしょう。レンタルで変わり型自転車を用意したり、マウンテンバイクのコースもあったらさらに楽しめそうです。

3. つくば再発見の楽しみ

サイクリングの本当の楽しさは、整備された自転車道を走るよりも、農道や住宅地、そして街中の車の入り込めないような道を見つけ、色々な発見をするところにあるのではないかでしょうか。つくばは、新と旧が共存している街ですが、自転車で少し足をのばせば、様々な発見があります。気のせいか、市の中心部をはずれて自転車を乗っている人を見かけると、外国人のことがよくあります。車で通り過ぎると見落としてしまいそうな事を、外国人の方がよく知っているかも知れません。

私は時には歩行者であり、そしてサイクリングもします。車でも出かけます。同じ道でも視点の高さも違えばスピードも違い、当然、見え方も違ってきます。多くの人が、様々な交通手段を体験し、自分の街を足元から見つめ、新しい魅力を発見することができたら、つくばがもっと楽しくなることでしょう。

さらに21世紀に向けて、車社会から脱皮し、公共の交通手段として郊外型路面電車ができたなら、広いつくば市の中、自転車と電車で自由に往来できる楽しい街になるのではないかと一人夢見ています。



万博記念公園内

『自転車のあるつくばの楽しい生活』 に対する提言

竹田 敏 (つくば市並木)

クルマを運転しない主義の私は運転免許を持っていない。6. 5 km離れた職場への通勤は自転車でしている。つくばで自転車通勤を始めてからすでに12年が過ぎた。1日往復13 km、1ヶ月25日の通勤とすると、ひと月で325 km、1年で3900 kmとなる。12年で40000 kmを超え、地球の赤道を一周してしまったことになる。そんな私の経験からつくばにおける自転車ライフの問題点などについて提言したい。

自転車を利用する立場で、つくばの道路を道路交通法による規定から考えてみると、以下の三つのカテゴリーに分けられる。(1) 自転車道が整備された道路。メイン道路である東大通り、西大通りそれに“つくば公園通り”がこれにあたる。(2) 道路標識等により通行が許可されている歩道がついた道路。都心部の道路の多くがこれに該当する。(3) 田んぼの中の道など、歩道もない道路。

道路交通法によると、第一のカテゴリーの道路では自転車は自転車道を通行しなければならない。第二の場合、自転車は車道を通行するのが原則だが、歩道も利用できる。第三の場合、歩道はないのだから、当然車道しか通れない。

つくば市の場合、東京のような大都市とは違い、歩道を歩く人はずっと少なく、歩道を走る自転車が歩行者にケガをさせることはあまりない。むしろ、車道を走る自転車利用者がクルマの事故にあうことの方が圧倒的に多い。

ということで、つくばでは前述の(3)の場合を除いて、自転車道か歩道を通行するのが一般的である。だが、自転車で通行してみると、いかに不都合な点多いかに驚かされる。

まず、交差点に留まらず、ひんぱんに存在する段差である。一応、角は

削ってあるものの、3～5センチはある段差を通過する時、前輪と後輪とでガタン、ガタンと二度のショックは避けられない。補助イスに子どもを乗せて、自転車を走らせている主婦の方は考えたことがあるのだろうか。段差を通行する時、自分は段差に合わせてお Siri をちょっと上げればいいが、後ろの子どもにはもろに衝撃が伝わっているのだ。

二番目は、安全面で重要な問題である。それは、歩道や自転車道の真ん中に突然出現する車止めである。歩道に車両が進入することを防いでいるこの車止めは、たいてい2～3本の鉄柱で、始末がわるいことに、ほとんどの場合、夜間の反射板の整備が不完全である。夜、自転車走行中にこれにぶつかり怪我した友人を多く知っている。

さらには、自転車道を逆走してくるオートバイである。新聞配達やソバ屋の出前の兄さんであるが、車道にでるよりも近道とばかりに平気で自転車道を疾走する。

安全で快適な自転車ライフをつくばに作るためにには、まず、自転車通行における障害を取り除くことが肝心だと思う。第一は、もちろん、自転車道の段差の解消である。「たった20センチほどのはばでよい。つくば市全部の段差を、アスファルトで埋めるなどで失くせたらどんなに快適だろう。」段差を通過するたびに私は思う。

次に、歩道の車止めの整備である。自転車の弱いライトでも十分認められる高性能な反射板を早急に設置することが、自転車利用者の安全をかかる上で、ぜひとも必要である。最近、都心部近くの土浦学園線歩道に設置された、ソーラー・システムの車止めなら最高だと思う。

また、間接的なことであるが、自転車利用者を保護するため、市は広報活動を通じ「公徳心の向上キャンペーン」をやるべきだと思う。歩道にしばしば散在している、割れた空きビンは自転車をパンクさせる一番の原因である。自転車盗難はまさに自転車愛好者の敵である。自転車を盗む人の大半は「ほんのちょっと先まで」という軽い気持ちと思われるが、盗まれた側からすれば重大なことである。また、自転車のサドルだけをはずして持ち去るというのは単なる愉快犯としか思えない。事実、大抵のばあい近くの草むらなどにサドルが投げ出してある。

“自転車を楽しむ都市”を構築するために“市が無料の貸し自転車”を行う、というのが私が長年考えているプランである。仙台市では一時この

システムを実施していたようだが、市営の貸し自転車の基地を市内に数箇所つくり、乗り捨て可能にする。市民ならだれでも利用できるようにすれば盗難自転車の件数は確実に減るはずだ。

数年前に廃止された筑波鉄道の跡地に自転車専用道路を設置するという計画があると聞く。市営の貸し自転車のステーションをその付近に作れば、いままで遠隔感の強かった、市中央部からの筑波山サイクリングも容易に受け入れられるのではないか。

とまれ、“クルマ社会つくば”では弱者と見なされている自転車愛好家たちの意見を聞く場をつくり、クルマ社会と共存できる環境づくりを積極的に進めていく姿勢が、今のつくばには大切なのではなかろうか。

市民レポート
自転車のあるつくばの楽しい生活 *TUTC Library* ——8

●——平成6年3月31日

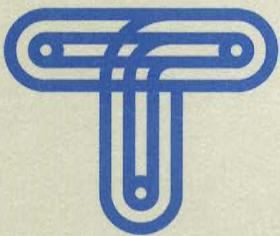
発行人——浅谷 陽治

発行——財団法人 つくば都市交通センター

〒305茨城県つくば市吾妻1丁目5-1

TEL 0298-55-7211 FAX 0298-56-0311

●——非売品



*Tsukuba Urban
Transportation Center*

財團法人 つくば都市交通センター

〒305 茨城県つくば市吾妻1丁目5-1
電話=0298-55-7211 [代表]